

小さき兄弟会

臨時総集会

ラ・ベルナーアシジ



2006年

目 次

2006年臨時総集會について.....	5
---------------------	---

総集會での総長の報告(プレゼンテーション)

明晰さと大胆さをもって	11
さあ、始めましょう.....	14
1. 明晰さと大胆さをもって.....	15
2. いつも福音を福音として受け入れる	18
3. 信仰の力をもって.....	20
4. フランシスコと彼の生活様式は今でも通用する	21
5. 謙遜と信頼.....	25
優先課題に照らしてみた私たちの生活.....	27
1. 祈りと献身の精神.....	28
2. 兄弟的な交わり.....	32
3. 小ささ、貧しさ、そして連帯.....	36
4. 福音化 ミッション(宣教・派遣・使命).....	41
5. 養成と学問.....	46
未来に向かって:夢を見、行動する時.....	51
1. 識別の時.....	51
2. 愛とあかしの時.....	53
3. 質問と提案の時.....	54
4. 自由とおおらかさの時.....	55
5. 交わりと兄弟愛の時.....	56
6. 協力の時.....	57
7. 再編の時.....	58
8. 統合と融合の時.....	59
9. 連結の時.....	60
結論.....	61

臨時総集会総括文書

プレゼンテーション	65
序文	67
意味を乞い求める者	68
希望の訪れ	69
賜物の光のうちに	73
なによりもまず生活から	73
会則と生活	74
信仰の賜物	75
賜物の論理	78
賜物の光のうちにある「派遣されて宣教する使命を帯びた兄弟共同体」	83
賜物である兄弟たち	83
すべての被造物の小さき兄弟	84
兄弟的生活への配慮	86
対話と文化内開花 (INCULTURATION)	88
エンマウスの方法論	91
未来へ向かう道	95

2006年臨時総集會について

そもそも総會とは何か

総會は、本會全体の兄弟的交わりの真のしるしでなければならぬ。総會の任務は次の通りである。すなわち、本會の靈的繼承財産と生活を検討し、それを守ること、本會の發展のための新たな方法や手段を吟味し、本會の適切な刷新を推し進めること、固有法を制定すること、會の最高統治機關、すなわち、総長、副総長および総理事を選出すること、および他の重要な業務を取り扱うことである。（會憲第188条）

臨時総集會の位置づけ

- 4 800年祭は、會の兄弟共同体全体にとって、また、フランシスカン家族にとって、カイロス、すなわち、會自体の「再建・再創立（Re-foundation）」を促す真の適切な恵みの時となり得る。
- 10 総長と総理事會は、私たちの生活様式が含んでいる聖福音の実態と力を「言葉と行いによって証しする」自らの任務を自覚して、一人ひとりの兄弟に、そして各共同体および管区に、一つの旅程の作成を依頼いたします。それは、私たちの生活様式の本質的諸要素の上に、私たちの生活とミッション（使命・宣教・派遣）を再建するために、必要な識別に取り掛かることによって、私たちの生活と活動の様々な場で、理想において共に歩ませてくれる旅程です。

祝典の旅路

15 旅路は三段階に設定されています。いずれも次のような方法で適切な時期に向けて導きます。

傾聴、會話、福音的な識別（2006年）。生活を変えるために耳を傾けよう。「主よ、私に何を御望みですか？」

個人として、また兄弟共同体として福音に基づく生活を提唱す

る能力を、聖なる活動を通して具体化する(2007年)。「大胆に福音を生きよう」

驚嘆の念と感謝の念をもって私たちの召命の偉大な賜物を祝い、それを言葉と生活によって証しできるようにする(2008 - 2009年)。「言葉と生活を通して主にすべてをお返ししよう！」

活動

聖フランシスコの書き物の改訂批判版(第3版)を、短い注釈をつけて出版する。

会の主要言語で会則を出版する。

会の第一回会憲から現在の会憲にいたるすべての会憲を出版する(ラテン語)。

会の公文書の手引書を出版する(1963年から現在まで)。

AFH(フランシスコ会史選集)の臨時増刊を出版する。

正義・平和・環境保全(JPIC)の国際大会を開催する(2006年)。*兄弟長谷川と阿部が参加しました。

霊的な総集會を開催する(2006年)。

生涯養成担当者の国際大会を開催する(2007年)。*兄弟長谷川が参加予定。

国際大会：「小さき兄弟会の昨日と今日」を開催する。

海外福音宣教に関する国際大会を開催する(2007年)。

会の若い兄弟たちのためにアシジで幕屋の集會を開催する(2007年)。*聖地で開催：兄弟小西が参加予定

「創立の恵み」ローマ、2004年 から

1. はじめに

臨時総集会は、15日（金）ラベルナへの一日巡礼で始まりました。16日（土）は会議のための諸手続き（出席点呼、全体会の司会者やグループ毎の進行係と書記を決める等）。さらに、臨時総集会準備文書について、また総会全体のアイコンとして用いられるルカ福音書24章「エマウスへ旅する弟子」についての解説がありました。午後、教会史の専門家によるフランシスコの会則が歴史の中でどのように受け止められてきたかについての講演と質疑応答がありました。17日（日）はお休み（一日雨）。なお、代議員として前総長の兄弟ジャコモ・ビニばかりでなく、兄弟ヘルマン・シャロック、兄弟ジョン・ヴォーンといった歴代総長たちも参加しました。

2. 第一週：18 - 23日

講話、言語別グループでの分かち合い・討議、全体会、黙想テーマは、18日（月）福音と信仰、19日（火）関係性、20日（水）対話と宣教。講話は外部から三人の講師による。かなり専門的なものもありました。講話の後で、言語別に11のグループによるコメントと質問、提案・課題の作成。全体会での発表と講師との対話（質疑応答）。そして午後は、その日のテーマに関連する聖書箇所についての個人黙想。夕方には、言語別グループでの祈りの分かち合い、という構成で毎日のプログラムは進められました。

21日（木）のテーマは会則。午前はドイツ合同修練院の修練長の兄弟コルネリオ・ボールによる会則についての霊的講話と黙想。午後はこれまでの分かち合いと提案・課題を言語別グループでまとめる作業に当てられ、夕方は全体会でそれを発表しました。

22日（金）は午前と午後の二回に分けて総長の報告（各一時間）がありました。実際の報告は要約されたテキストとパワーポイント

トを使っのプレゼンテーションでした。それぞれの報告の後、言語別グループで総長報告を検討し質問事項をまとめました。なお、要約テキストと長文の報告書のいずれも総本部のHPから手に入れることができます。(日本語版は準備中)

23日(土)は一日かけて総長との対話(質疑応答)のために時間が使われました。晩の祈りは聖クララ聖堂でクララ会の姉妹達と合同祭儀。

3. 第二週：25 30日

講話、協議会別グループでの分かち合い・討議、全体会
テーマは、25日(月)フランシスカン召命、26日(火)兄弟性、27日(水)ミッションと再建。第二週は総会に参加している三人の兄弟がルカ24章のイメージを使い、毎日それぞれのテーマを発展させて話をしました。午前中に各兄弟は45分程度の話をします。その後、13の協議会別グループに分かれて討議し、テーマに沿った提案を3つ作成しました。夕方の全体会で、それぞれのグループで検討された提案の報告がありました。

4. 総括文書作成と承認へ

第一週の諸提案・課題、第二週の諸提案、総長との質疑応答で出てきた課題等はさらに討議され、3人の兄弟からなる専門家チームによって総集会のメッセージ・提案として「総括文書」にまとめられます。26日(火)の夕方の全体会で草案のアウトラインが提示、討議されました。最終草案は30日(土)に発表。総集会で承認された総括文書は後日、総理事会で最終編集されて公布されます。この総括文書は兄弟達が2009年の800年祭を相応しく準備するため、また一人一人を励ます実践的な性格を持った霊的文書として配布されるものです。

9月27日(水)総括文書の第一草案が提示され、全体会で説明と討議。

9月28日(木)総括文書の第二草案を協議会別に検討、全体会で討議と修正提案。

9月29日(金)グレッチオとフォンテコロンボへ巡礼。総長から会則の授与。

9月30日(土)総括文書の承認。午後はフリー。

10月1日(日)閉会式と派遣ミサ。昼食後解散。

5. まとめ

臨時総集会の召集(会創立800年への準備の一環): エンマウスへ旅する弟子たちのイメージ

- ・ 失意と不信から希望への道筋を見出す。
- ・ パンを割くことの中で主の現存を見出し、交わりとミッション(使命、宣教、派遣)の道へ
二週間に話し合われるテーマ(臨時総集会の内容とスケジュール)
- ・ 私たちの生活の中心的テーマについて研究: 召命、兄弟性、ミッション(使命、宣教、派遣)について話し合う。
- ・ 「現代における福音生活の提案としての会則」について黙想と祈り、「現代のフランシスコ会の生活と使命に関する総長の報告書」と比較
総集会は続く・・・！！
- ・ 各管区で総括文書の指示*を日々の生活の中で実践することを求められている。(総会を継続)
- ・ 例えば、幕屋の集会等を開き、兄弟たちが生活とミッションを改善する適切な方法を識別することが求められています(「創立の恵み」17参照)。

*総括文書はメッセージと付録の二部構成になっています。いずれも総集会で話し合ったことがまとめられています。付録は「未来に向う道(Paths for the Future)」というタイトルが付いた提案集です。各管区は総集会で用いられた方法論(エンマウスへの道)を使って、800年祭の準備をするように求められています。日本管区の生涯養成コースで用いられているものと良く似た方

法論です。さらに日本の現状に合わせて発展させましょう。

6 . 終わりに

今回は800年祭の準備としての霊的総集会ということで、研修と黙想、そして分かち合いの集いという感じでした。なお、詳細は総本部のHPで見たり、聞いたり、読んだり出来ます。今回から講演&講話レジメ、ミサ説教、議事録、写真の他に、マルチメディアとしてビデオと講演録音(MP3 & Podcasts)が公開されています。関心のある方は是非、以下のアドレスにアクセスしてください。DVDが管区本部にあります。ご希望の方に配布いたします。<http://www.ofm.org/ofmnews/00capgenst06EN.php>

なお、総長の報告書と様々な講演などの日本語版は、翻訳編集が終わり次第、日本管区WEBサイトの「資料室」に掲載します。

管区本部

小さき兄弟会
臨時総集会

ラ・ベルナ - アシジ

明晰さと大胆さをもって
再創立の時に

総長のプレゼンテーション

2006年

親愛なる兄弟の皆さん、
「主があなた方に平和をお与えくださいますように！」

見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び（詩篇 133：1）。やがて800年祭を迎えようとしているこの兄弟会に属していることのなんという恵み、なんという喜びでしょうか。そして今日、私たち兄弟は聖霊の働きにより、全身全霊をかけて、主をお喜ばせする方法、いただいた召命に忠実であるための方法、いただいた当初の召命を保持する方法、教会の中で私たちの主イエス・キリストの聖福音を生き、それをすべての人々に告げ知らせる方法を探し求めています。

この総集会はまた、何世紀もかけた識別の努力の表現であると同時に、全兄弟会にとって恵みの時でもあります。それはまた、回心のチャンスであると同時に、各兄弟および全兄弟会がこの冷淡な時代にイエス・キリストのまことの弟子となる方法を謙虚に忍耐強く探し求める時でもあります。この時代は、聖霊の働きにより変貌させられていますが、この時代を生き、聖フランシスコにより守られ提案された生活様式を、忠実に愛を持って守りつつ、最も愛すべき神に奉献し、すべての人を愛をもって抱きしめ、私たちの主イエス・キリストの福音を全世界に告げ知らせることは私たちの運命なのです。

さあ、始めましょう

私たちはよく危機の話をします。制度の危機、価値観の危機、参考とすべき模範の危機など。そして、私たちはみな、意識するとしないとにかかわらず、危機に埋もれて暮らしています。それなのに、私たちはこの危機を乗り越えて生きる恵みや勇気を持っていないのです。多くの人（私たちの中にもいますが）、ダチョウのように砂の中に頭を隠して見て見ぬ振りをし、それは一時の嵐（スコール）のようなものだからすぐに過ぎ去り、やがて太陽が再び顔を出すと思っているのです。

この過渡期にこの危機を成長の糧として生きるためには、何と名付けてよいのか分からない何か新しいものが芽吹いている、あるいは、すでに色づき始めている（ヨハネ 4：35 参照）と考える必要があります。これらの新しいものの種の中に、すべてを新しくされる歴史の主の現存を発見することが必要です。更に歩を進め、向こう岸に渡るように（マタイ 8：18 参照）促してくださる聖霊の息吹に身を任せて、移住する態度を身に付けることが必要です。それはつまり、絶えず旅の途中にあることであり、耳を傾けるために沈黙することであり、私たちが自分の誓約した「生活様式 (Forma Vitae)」の指し示す方向に向かうのを妨げるような「安全」（組織）を捨てるために自由になって内面の貧しさを保つことを意味します。

聖霊の力に導かれるままに「忘れ去られた修道院」（2003年総集會総括文書 37 参照）に向かう勇気が私たちにはあるでしょうか？「私たちの天幕に場所を広く空け」（イザヤ 54：2 参照）、「新しいぶどう酒を新しい皮袋に入れる」（マルコ 2：22）大胆さを私たちは持っているでしょうか？夢見る勇気があるでしょうか？こ

のプロセスがもたらすすべてを受け入れて「再建」を目指す大胆さを持っているでしょうか？

そのために必要とされていることとは何でしょうか？

1. 明晰さと大胆さをもって

「新しいぶどう酒を新しい皮袋に入れる」(マルコ 2:22 参照) ためには、明晰さと大胆さが必要です。「向こう岸に渡る」(マタイ 9:1、14:22 参照) ためには明晰さと大胆さが必要です。「私たちの生活の本質に立ち返る」(2003年総集会総括文書2 参照) ためには明晰さと大胆さが必要です。現代にフランシスコの「創造性と聖性」(奉獻生活 37 参照) を蘇らせるためには、明晰さと大胆さが必要です。「生きた水の泉」(エレミア 12:13) に立ち返り、「聖霊を受けて」(2003年総集会総括文書2 参照) 「再び生まれる」(ヨハネ 3:3) ためには、明晰さと大胆さが必要です。

しかし、ここでいう明晰さと大胆さとはどういう意味でしょうか？

この臨時総集会に宛てた私の報告書のタイトルは「明晰さと大胆さをもって」となっています。「明晰さ」とは、明快である資質とか状態を指しており、極めて優れた明晰さをもって考えることのできる洞察力、あるいは洞察力を持った人を表現する言葉です。「大胆さ」とは、大胆である資質とか状態を指しており、困難なことや危険なことに敢えて取り組むことのできる人を表現する言葉です。

第一印象で語ることを許されるならば、「明晰さ」とは、兄弟会の未来に通じる扉を開くようなプロジェクトをうまく練り上げるために、兄弟が持っていないなくてはならない資質のように見えるでし

よう。それは、状況のさまざまな局面を感知し、取り得る選択肢のさまざまな結果を予測することのできる洞察力です。それは、兄弟会がかねてから諦めることはできないと指摘していた目標を達成したいならば、兄弟会の取るべき行動方針を決定する知性でもあります。「大胆さ」とは、「明晰さ」をもって見たことがらを、その危険や困難にも関わらず遂行したいと願う時に兄弟たちが持っていないなければならない資質と考えることもできるでしょう。しかし、私が言っているのはそういうことではありません。総集會に宛てた報告書で私が述べている「明晰さ」と「大胆さ」とはそういったものではありません。私は企画の専門家である兄弟会を夢想してはいません。また、私たちの兄弟会が専門家の企画したことを完璧に遂行する修道会であるべきだなどとも考えていません。私が報告書の中で言った「明晰さ」と「大胆さ」とは、神学的な信仰の恵みに深く根ざし、希望と愛を持った資質であって、知性や意思の力ではないのです。

「信仰によって、ノアはまだ見ていない事柄について神のお告げを受けたとき、恐れかしくみながら、自分の家族を救うために箱舟を造り、その信仰によって世界を罪に定め、また信仰に基づく義を受け継ぐ者となりました。信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです」(ヘブライ 11:7-8)。信仰によって、処女マリアは、「お言葉のとおりになりますように」と言って、神だけがご存知の旅路の巡礼者となることを受け入れ、主のはしためとして、その道がどこに通じるのかを尋ねることもせずに旅を続けました。

神は信じる者の光であり、助言を与え、召し出し、呼びかけ、導き、愛して下さいます。信じる者の生活は神によって完全に照らされていますが、同時に何も知らないという暗闇の中に置かれています。それは、神が神秘の方であり、未知の方であるからです。神は私たちを超え、私たちを驚かせるのです。

これは、私たちのために人となられた神のいと高き御子イエスも歩まれた信仰の道です。イエスの地上での生活は、父なる神への素朴で堅固な信仰によって特徴付けられています。信仰を基盤にして、イエスは父なる神の愛を、空の鳥や野のユリに対する神の愛情あふれる御心を、そして、遠く離れた息子や迷える羊に対する神の御心配を知っておられます。しかしイエスはまた、闇夜をも知らなければなりませんでした。そして、自分が見捨てられたと感じたとき、その理由を、神が見捨て給うた究極の孤独の理由を尋ねられたのです。

信じる者は頭脳明晰です。それは、その人が自分の歩む道を知っているからではなく、自分が信頼している方を知っているからです（2テモテ 1：12 参照）。そして、彼は大胆です。それは、危険に直面して困難な事柄に取り組む能力に恵まれているからではなくて、自分が信頼している方を知っているからです。そして、彼は自分のことをこの世の異邦人であり旅人であると言っていますが、それは、自分が信頼している方を知っているからにほかなりません。また彼は、自分の故郷に帰りませんが、それは、自分が信頼している方を知っているからであり、さらに優れた故郷（ヘブライ 11：13 - 15 参照）を探し求めているからです。

確かに、私たちは自分の生活について問いただし、自分の置かれた状況と周囲の社会状況を分析し続ける必要がありますが、現代においては分析したり、問いただしたりするだけでは不十分です。今日ほど忠実さに創造性が必要とされているときはありません（奉獻生活 37 参照）。現在を、「過去の記憶としてだけでなく、未来の預言として」（使徒的書簡 新千年期の初めに 3）生きることが必要です。しかしそれは、信仰に導かれてこの旅路を歩んで初めて可能なのであり、信仰を基盤にしてこそ、昨日のように今日を恐れずにいることができ（マルコ 16：6 参照）聖パウロと共に「私を強めてくださる方のお陰で、私にはすべてが可能です」

(フィリピ 4 : 13) と言うことができます。

私たち兄弟に必要な明晰さと大胆さは、主がいつも私たちと共にいてくださるという確信に基づいています。「どうして心に疑いを起こすのか」(ルカ 24 : 38)、「私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ 28 : 20)。私たちに必要なのは、できないことは何一つない神(ルカ 1 : 37 参照)への信仰から生まれる明晰さと大胆さです。

私が「明晰さと大胆さをもって」と言うとき、それは、「信仰の闇から、希望の確かさと愛の力をもって」という意味なのです。今日、始まりに当たって、私たちはフランスコのように、主キリストの御前に、私たちのプロジェクトの明晰さや私たちの力に対する誇りを差し出すのではなく、心の闇と人間としての弱さを(PrCr 参照)差し出しましょう。

2 . いつも福音を福音として受け入れる

福音は、それを幼子のような心で受け入れる人を変える力を持つ(マタイ 11 : 25 参照) 美しい恵みと熱い愛を伝えてくれる良き知らせであり続けるということを信じる必要があります。福音は、「お言葉どおり、この身に成りますように」(ルカ 1 : 38 参照)と言われたナザレのマリアのように、貧しく従順な心で受け入れるすべての人にとり、祝福の源であり続けます。福音は、「これこそ、私が望み、探し求め、心からしてみたいと熱望していたものです」(1 チェラノ 22) と言ったフランスコのように、即座に受け入れるすべての人にとり、自由への道であり続けます。福音は、私たちの至らなさにもかかわらず、それを生き抜こうとするとき、福音であり続けます。

800年を経た今、私たち小さき兄弟は福音を前にして、幼子の

ようであるように招かれています。なぜなら、「神の国はこのような者たちのものである」(マルコ 10:15)からです。また、貧しい者であるように招かれています。なぜなら、貧しい者は祝福されているからです(ルカ 6:20)。また、「無くしたドラクメ銀貨」を見つけた者の喜び(ルカ 15:8ff 参照)と、初めてそれを発見した者の新鮮な驚きをもって福音に接するように求められています。なぜなら、このようにしてこそ、私たちは福音を、その徹底的な要求を薄めて解釈することなく(2003年総集会総括文書2) 私たちの「生活と会則」(未裁可会則 1:1)に変えることができるからです。

フランシスコの体験から800年を経た今、私たち小さき兄弟は、福音を通じて自由で無防備であるように求められています。そして、主によって照らされ、主によって問いただされるように求められています。それは、私たちの生活が創立当初の味わいと若さを取り戻すためであり、フランシスコと最初の仲間たちの生活が福音によって揺り動かされ、問いただされたように、私たちの生活も福音によって揺り動かされ、問いただされるためです。

フランシスコの福音への回心から800年を経た今、私たち小さき兄弟は福音を大いなる貴重な宝と考えるように、一つのイデオロギーに貶めることなく、「座右の書」として考えるように、すなわち、私たちの生涯の選択を照らし、正当化することのできる養成の基本的教科書と捉えるように求められています。

福音に立ち返って初めて、「私たちの創立の恵み」を復活させることができます。そうすることによって初めて、私たちの生活は「詩」を、すなわちアシジのフランシスコの生活の中で輝いていた美しさと魅力を取り戻すことができるでしょう。そして、私たちは悲惨さや隷属状態、恐れや悲しみから解放されるだけでなく、兄弟である人々を悲惨さと隷属状態、恐れと悲しみから解放することができるにちがいありません。

会を再建するためのあらゆる努力も、あらゆる改革も、組織を新しい状況に適用させようとの努力も、日常生活の中で会の優先課題を実践すべく行っているあらゆる努力も、福音に立ち返ることがないならば、すべては意味のない、不毛なものになってしまうでしょう。

3. 信仰の力をもって

福音を良い知らせとして受け入れること、向こう岸に渡ること、福音を実践しながら現在を生きること、そして、物事を始めること、これらはいずれも信仰を前提とします。信仰なくしては、このいずれも不可能です。信仰がなければ、発展性のない繰り返しの生活をして夢を無駄にし、少しずつ信仰から来る喜びを失っていく危険性が大きくなります(2003年総集会総括文書6参照)。

信じる者たち - アブラハム、マリア、フランシスコ、教会 - はみな、召された者であり、彼らのうちに私たちもまた召されているのです、「生まれ故郷、家族、父の家を離れて、主が示す地に行くように」(創世記12:1参照)と。

彼らのように、私たちも神の御言葉を信じて出発するのです。神の約束に対する信仰を持って、アブラハムのように行く先も知らずに出発するのです。信仰によって、私たちは路上の人となり、天幕に住んで、主が示してくださる地にいつでも向かう用意をします(ヘブライ11:8-10参照)。神の御言葉への信仰に突き動かされて、神の目で現実を見、その現実の中を、神の光に導かれて動くのです。

私たちを出発させてくれるのは、目に見え言葉で説明できるはかない美しさではなくて、私たちが希望する言葉に言い表せない永

遠の美しさなのです。ですから、私たちはたとえ「主の園」(創世記 13 : 10 - 12 参照) のように見えても、「潤った低地の町々」に天幕を張らずに、貧しく十字架に付けられたキリストの弟子となって、キリストのうちに私たちの生活に対する神の豊かな祝福を見いだすことを希望するのです。

今こそ、信仰をもって実践する時、信仰に基づいて動く時、信仰の上に生きる時です。信仰だけが、すべては恵みであること、そして神の私たちへの無限の愛がすべてのものに現れていることを悟らせてくれるのです。山を動かすのはこの信仰であり、教会の子らを動かすのはこの希望であり、未来への道を開くのはこの愛です。私たち皆の心を平和で満たしてくれるのはこの生き方なのです。

4 . フランシスコと彼の生活様式は今でも通用する

聖フランシスコは確かに最も普遍的な聖人です。多くの弟子たちが世界中に散らばっており、カトリック教会内だけでなく、姉妹教会の中でも、フランシスコの普遍性をあかししています。「小さき貧者」は、フランシスカンやカトリックだけの守護聖人ではありません。彼は実際、すべての善意の人々の聖人なのです。教皇ヨハネ・パウロ 2 世は、2003 年の聖霊降臨の総集會に宛てたメッセージの中で、聖フランシスコの現実性について「聖フランシスコの人を惹きつける力は偉大である」(メッセージ 5) と述べています。

800 年を経ても変らぬフランシスコの魅力の秘密は、その「非・現実性 (*non-actual*)」にあります。フランシスコは他のすべての聖人と同じように「非・現実的」です。彼はいつも現実の先を「見越し」、未来を見通して、現在に捕われないのです。それは「見張りの者」(イザヤ 21 : 11 - 12 参照) や自分のことを

真の「この世の旅人であり、仮住まいの身である」(1ペトロ2:11、会則6:2参照)と感じている者の宿命です。それは旅人(homoviator)の、絶えず探求している信仰者の、そして、イエスの弟子であり、フランシスコのように福音を会則と生活にしている人(会則1:1参照)の条件です。それは、「他人の屋根の下に宿をとり、故郷にあこがれながら、平和に旅をつづけるために」(聖ボナVENTOURAの大伝記7:2)この規範を自分のものとするすべての旅人の宿命なのです。

現在は過ぎ去り、流行は変わりますが、生活様式としての福音は変わりません。「イエス・キリスト(御父から人類への福音)は、昨日も今日も、また永遠に変わることはない方です」(ヘブライ13:8)。それは、「小さき貧者」のように福音を自分の会則と生活とする人が流行遅れにならないのと同じようなものです。

フランシスコはその現実性、いやむしろその「非・現実性」のゆえに、イエスのメッセージをラディカルに生き抜くように、「心の耳を傾けて、神の御子の声に従いなさい」(全兄弟会にあてた手紙6)と私たちに呼びかけています。フランシスコはその現実性、あるいは「非・現実性」のゆえに、キリストの御手に触れていただくように、主の声に導かれ、主の恵みに支えられるようにと私たちを招いています(奉獻生活40参照)。

私たちはキリストに触れていただき、福音を本当に私たちの会則と生活にする勇気を持っているのでしょうか？わたしたちの現実性、あるいはむしろ「非・現実性」、つまり、私たちの声が現代社会で預言的な叫びとなれるかどうかは、これらの質問に対する答えにかかっています。

しかし、みんなの絶えざる熱意があれば兄弟会の生活とカリスマは必然的に生き残るはずだと考えてはなりません。神の恵みと兄弟各人の謙虚な協力があって初めて、刷新された生活の実り

と忠実さをもって受け継がれたカリスマの実りを結ぶことができるのです。そしてその実りは、神の憐れみと私たちの弱さや惨めさとが恋焦がれるようにして出会った時に初めて成長するのです。私たちすべての兄弟は、この出会いの幸せを味わうように招かれています。自分の弱さと惨めさを自覚すればするほどに、心から呼ばれていると感じることができるでしょう。

この恵みと出会うためには、兄弟フランシスコの辿った道を理解し、私たちも辿ってみることが大いに役立つと思います。

フランシスコの歩みを辿ってみると、理想やプロジェクトや想像力、限界や恵みが見られます。主はプロジェクトを拒否してはおられません。主はただ、その恵みを通して私たちを招いておられるのです。思い違いをしないで、それらのプロジェクトを実現する方法を探すようにと。フランシスコがスポレトで見た夢の中で、彼は自分の野望が思いがけない形で実現する可能性を与えられました。ここで肝心なことは、フランシスコがすべての物事における真理、すなわち、真の主を求め、真の栄光を求めていたということです。フランシスコの辿った道を歩む私たちの第一歩も、必然的に真理の探究となります。

真の主に出会うならば、私たちの霊的な体験は、主の復活の日に弟子たちが体験した時と同じようなものになるはずですが、すなわち、恐れ、うろたえ、慌て、喜び、仕える心です。恐れとは、主が私たちを罪びとを覚えていたくださるからであり、うろたえとは、幸せのあまり夢が実現するかどうか分からないからであり、慌てとは、やらなければならないことが多いからであり、喜びとは、道を見出したからであり、仕える心とは、唯一の主を発見し、「主よ、私に何を望みますか」(3チェラノ6)という気持ちを持っているからです。

自分の惨めさを知れば知るほど、受けた憐れみに対する恐れへの念

は増すこと、自分の貧しさを知れば知るほど、いただいた恵みを喜ぶ気持ちは増すこと、そして、自分の弱さを認識すればするほど、私たちの心は神の甘美な慰めに満たされ、それは、神がその僕である私たちの小ささを顧みてくださったからであることを私たちは直感によって感じています。

この総集会に宛てた私の報告書では、私たちの会則と生活を誓約するようにと神が招いてくださった人々への神の愛により実現した奇跡については触れることができませんでした。私が触れたのは外見だけで、光と影、すなわち会の各管区の生活の中で肯定的と思われる面と否定的と思われる面とを指摘し得ただけです。報告書の中では重要な、本質的なことが書かれていなくても、各兄弟の心の中に、すなわち、彼を生かす恵みと彼を突き動かす聖霊の中に、また、彼を強める希望と彼を支える信仰の中に、彼を神とこの世のすべての貧しい人とに結び付けてくれる愛の中にそれらを見つけることができるでしょう。

従って、ここで兄弟フランシスコの辿った霊的な道、「主よ、私に何をお望みですか？」と尋ねるに至った道について述べたいと思います。フランシスコは、神の御旨を真剣に捜し求め、至高なる天の御父に、そのいとし子である私たちの主イエス・キリストに、そして慰め主である聖霊に、私たちの兄弟会のだれ一人として、自分の生活において主をお喜ばせする方法を忍耐強く探ることを拒むことがないようにしてくださいと頼んでいます。

伝記作家たちは、兄弟フランシスコが神の御旨を探し求めたそのプロセスについて次のように描写しています。自分を軽蔑し、祈りのうちに主に出会い、心からの慈愛をもって貧しい人に出会い、主イエス・キリストへの愛によって清貧と出会い、ハンセン病者と出会い、彼を抱きしめ、接吻し、謙遜に仕え、真心を持って世話をした。そして、ハンセン病者の傷を憐れみをもって手当てしたことにより、以前は耐えられないと思われていたことが大いな

る甘美さと優しさに変った、と（三人の伴侶の伝記 11 参照）。今日、希望をもって未来に目を向ける私たちは、兄弟愛に満ちた忠誠心をもってフランシスコを見つめ、すべての物事の中に主の御旨を探る方法を彼から学ばなければなりません。

5 . 謙遜と信頼

私たちが誓約した生活様式とは、「私たちの主イエス・キリストの聖福音を守ること」（会則 1 : 1）、私たちの主イエス・キリストである福音を守ること、福音を信じること、すなわち、主キリストを信じること、主を抱き、愛し、主を自分自身の生活の中で筆舌に尽くしがたい恵みとして、賞賛すべき召命として、永遠の仕事として、謙遜と信頼をもってさらに深く分け入るべき神秘として体現することです。

この意味で、常に完全には知りえず、理解しえず、完成され得ないという意味で、私たちの生活様式は神の子としての条件と同じく、一つの「神秘」でもあります。

まず、すべての兄弟が福音の教えをまだ実践できていなくても、それはフラストレーションの理由にはならず、むしろ謙遜になるきっかけとなり、幻滅の理由にはならず、むしろ主イエス・キリストに同化するためのプロセスにおいて成就すべき仕事の一部となるということを理解するためには、私たちの生活のこの本質的な側面を強調することがとても重要であると思われます。また、次に、総集会に宛てた私の報告書の中で触れた光と影、すなわち、近年の諸総集会で兄弟たちの注意を促すために指摘したさまざまな優先課題に関連して明らかにしようとした光と影は、福音生活の完成に通じるプロセスの中で私たちの状況を示すものとして理解されるべきであることを代議員の皆様と全兄弟会に申し上げたいと思います。

兄弟たちは、主なる神がその無限の慈しみにおいて、私たちに「神秘のうちに生きよ」と呼びかけておられることを心に留めなければなりません。私たちの主イエス・キリストに従うことは神秘なのです。それは、恵みであると同時に全生涯をかけた仕事であり、いつも近いのにいつも遠い、いつも自分のものなのに手が届かない神秘なのです。私たちが聖霊に従順であることは神秘です。それは、神の子の十全な自由を直感しての従順であり、しかも私たちの奴隷状態を体験しての従順です。父なる神への奉獻は神秘です。それは、相変わらず貧弱な奉獻ですが、いつも完全さに向かって導かれている奉獻です。私たちの愛は神秘です。いつも完全さを求めながらも、その現れ方が不完全な神秘です。

ということは、探し求めつつ生きるように、希望のうちに生きるように、謙遜のうちに生きるように、これまで歩んできた道だけでなく、これから到達したい目的地にも目を向けて歩くようにと主なる神が私たちを促しておられるということです。神に出会いたいと必死で願う心のあるところに、真の小さき兄弟がいるのです。

優先課題に照らしてみた私たちの生活

1998年2月に、総長と総理事会は会憲の第1条第2項を参考にしながら、特に重要な五つの優先課題に注意を向けるようにと兄弟たちを促しました。それらの優先課題を優先順に挙げると次のようになります。「祈りと献身の精神」₁、「兄弟としての生活の分かち合い」₂、「小ささ、貧しさ、そして連帯の生活」₃、「福音化 - ミッション」₄、そして最後にそれらの優先課題を支えるのに不可欠の「養成」です。

2003年の総集会は、2003年から2009年の6年間に、「本会の五つの優先課題の中に表明されているように、兄弟たちによって引き受けられた方向に更に進んでいくようにと提案しました。私たちはこれらを、『私たちのアイデンティティをどのように生き、世界の期待をどのように理解するかを読み取る鍵』であり続けると考えています」(2003年総集会総括文書4)。2003年12月に「小さき兄弟会の優先課題」という文書を兄弟の皆さま及び各管区にお送りしました。「兄弟的な世界を目指してキリストに従う」と題したこの文書の中で、総理事会は各優先課題についての参考資料を提示しました。その中には具体的な生活案が提示され、個人としてまた兄弟共同体として行う考察の出発点が示されていました。さらに、それぞれの優先課題へのアプローチは、兄弟性の視点から、すなわち、私たちが兄弟であるということを中心とし、ミッション(宣教・派遣・使命)を考慮しながら行われました。

今回の総集会への私の報告書もこれらの優先課題に重点を置いています。そして、各優先課題で指摘した光と影は、やり終えたことやこれからやるべきことのリストではなくて、プロセスを示すものであり、コミットを促すものであり、回心の恵みのチャンス

なのだということをもう一度強調したいと思います。

1. 祈りと献身の精神

観想的な面は私たちの生活と使命の「優先事項中の最優先事項」であり、「私たちの生活様式を中心軸」です。アシジのフランシスコが守り、提案した様式に従って教会の中で福音的な生活を送るように招かれている小さき兄弟たちは、フランシスコのように「祈りの人」でなくてはなりません。あるいは、さらに、自分自身を祈りの人に変えた人、主との出会いを知り、生き、喜ぶ恵みを持つ人間に自分自身を変えた人とならなくてはなりません。

私たちはフランシスコとクララ、そして、フランシスカンの流れを汲む偉大な神秘家たちから、兄弟愛の喜びと、小ささの喜び、神への憧れ、そして、神を求め、神を知り、神を愛し、神に仕えようとする情熱を受け継ぎました。「聖なる祈りと献身の霊を消さないようにしながら」(会則 5 : 2)「精神と心を神に向ける」(未裁可会則 22 : 19)ことは、すべての兄弟の何よりも大切な務めです。この選択は、小さき兄弟が生涯の間にいろいろな選択をするに当たって基準となり、選択すべき事柄を明らかにしてくれます。

祈りと献身の霊を生き生きと保つことは、会の創立の恵みの新しさと正統性を維持する上で、また、大胆さと創造性をもって時のしるしに答える上で絶対に必要です。祈りと献身の霊を生き生きと保つことは、聖霊に導かれて天の御父と御子イエス・キリストといつも新たな気持ちで出会うために、主と人間への燃えるような愛を持ち続けるために、そして、私たちのカリスマをさらに深く理解するために絶対に必要です。祈りと献身の霊を生き生きと保つことは、自分のルーツを発見し、未来への道を開きたいと思うならば、絶対に必要です。祈りと献身の霊を生き生きと保つことは、私たちの兄弟的共同生活に活力を与えるために絶対に必要

です。なぜなら、三位一体の営みに対する深い愛を観想することによって初めて、兄弟的な交わりの生活に一貫性を与える愛を兄弟愛に満ちた従順を通して学ぶことができるからです。祈りと献身の霊を生き生きと保つことは、キリストから出発して、キリストの愛を現代の人々に証ししたいと思うならば、絶対に必要です。祈りと献身の霊を私たちの生活の最優先事項として保つことができ初めて、私たちはキリストを発見し、キリストを証しし、キリストの弟子となることができます。「私たちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです」(使徒言行録 4：20)。

小さき兄弟としての私たちの生活が恵みと愛の神秘として理解される時に初めて、祈りはその神秘に分け入る道となります。私たちの生活が福音として理解され、それが各兄弟の存在に徐々に具現される時に初めて、祈りはその中で神の御言葉が安らぎ、育まれる懐となります。私たちの生活が信仰体験として理解される時に初めて、信仰と祈りが不可分の現実であることが誰の目にも明らかになります。

会憲の中で、祈りは私たちの召命の必要条件であると規定されています。なぜなら、神の愛し子の似姿として創られた私たちは、すべての被造物と共に、御父と御子と聖霊を賛美しなければならないからです。キリストの弟子である私たちは、この世でキリストの現存を証しする者となり、キリストの祈りを続けるようにと招かれています。アシジのフランシスコの弟子である私たちは、彼のように、すべての障害物を取り除き、あらゆる心配と不安を追い払って、主なる神に仕え、主なる神を愛し、称え、崇めなければなりません。

この優先事項中の最優先事項をどのように実践していったらよいでしょうか？

この問いに答えるにあたって、私の報告書の中の「活力のしるし」

と「回心への招き」、及び「良い状態からさらに良い状態に移行するプロセスの中で」というタイトルの下に書いたことが役に立つのではないかと思います。「活力のしるし」から見て取れる進歩は決して小さなものではありません。たとえば、祈りの意味と典礼生活の再発見、聖体祭儀と御聖体の崇敬の重要性の再発見、神の御言葉の重要性の再発見など。兄弟共同体の中で祈りのために捧げられる時間の少なさ、多くの場合の祭儀に見られる質の乏しさ、そして多くの場合に祈りのプロジェクトや黙想の家に対して兄弟たちが示す関心の低さなどは、「回心への招き」にはっきり述べられており、今後も続けられるべきことについては、「良い状態からさらに良い状態に移行するプロセスの中で」に述べられています。このプロセスは、主と出会うためには祈りが必要であるという前提を通して、典礼の祈りにおける創造的な忠実さを守ることから、祈りを私たちの魂の活動に変えるプロセスであると同時に、聖体祭儀と御言葉の傾聴とゆるしの秘跡を優先するに至るプロセスであると私は考えています。

理想と現実の間にあるギャップを埋める妨げとなり、私たちの祈りの生活における進歩をしばしば遅らせる原因となるものは何でしょうか？究極の理由は私たちの信仰と、私たちを取り巻く活動主義（仕事依存症）と深い関係があるように思います。

信仰という面で、修道生活全般、特にフランスカンの生活は、危機、それも大きな危機にあると言っても過言ではないと思います。それは正統性を論じる知的レベルの危機ではなく、正統なことを実践する実存的レベルの危機なのです。私たちの心が主に向けられずに物事や人間に向けられる時、私たちは信仰の危機に見舞われます。日常生活の中で何かを選択する時に信仰を基準とせず、自分の利益（神の御計画よりも自己実現を優先する）や自分の属するグループの利益を基準にする時、私たちは信仰の危機の中に生きているのです。言っていること、考えていること、行いが同じでないならば、それは信憑性の危機となるのです。

これらの信仰の危機に直面して、私たちの生活は、信仰を選択することによってのみその信憑性が確かめられ、個人及び共同体の祈りによって育まれますが、そのためには、継続性（ルカ 18：1 参照）と忠実さと特に忍耐（ローマ 15：4 - 6 参照）が必要です。祈りがなければ信仰は枯渇しますし、信仰がなければ祈りは無意味なものとなってしまいます。祈りと信仰は不可分のものであり、互いに養い育み合うものなのです。

この信仰の危機に仕事依存症が加われば - この仕事依存症によって、少なからぬ人々は、「正しい信仰」の欠如がもたらす空白を埋めようとするのですが - 「祈りと献身の霊を消す」(聖アントニオへの手紙 2) のは簡単だということがお分かりでしょう。「怠慢が魂の敵であり」、労働が、私たち兄弟が「忠実かつ献身的に」成し遂げるべき「恵み」であるとするならば、「祈りと献身の霊」は、フランシスコによれば「現世のあらゆる物事が従属すべき霊」(会則 5：2) であるのに、仕事依存症になった人々の目には、時間の浪費として、すでにやり終えた義務として、また、時間のつぶし方を知らない人にだけ有効なものとして映ることでしょう。そこで私は断言いたします。祈りは人間を隷属状態から解放する基本要素であり、機械的で非人間的な仕事の嵐から脱出させてくれる原動力である、と。

私たちの祈りの生活の理想と現実のギャップを埋めるためには、祈りと献身の精神について会憲が求めていること（会憲 II、総則 III 参照）に忠実であること、そして、エコロジカルな生活プロジェクトを作成することが必要であると思います。そうすれば、労働を主からいただく賜物であり恵みであると考え、従って、その恵みと賜物を受け入れる義務が私たちにあることを考えて、主を愛し、尊び、礼拝するためにあらゆる障害物を取り除き、祈りと献身の霊の首位性を守る(会則 5:2 参照) ことができるでしょう。マス・メディア、特にインターネットを用いる際には、必要な分

別を怠らないことがギャップを埋めるのに役立つでしょう。そのためには、初期養成の早い段階からの一定の自己鍛錬と適切な教育が必要です。

2．兄弟的な交わり

小さき兄弟としての私たちの生活とミッションを表すキーワードは「兄弟共同体」です。私たちは兄弟共同体であり、兄弟共同体として世界中に宣教のために派遣されるのです。私たちは主が兄弟共同体に与えてくださる兄弟を受け入れます。兄弟共同体の中で人間的な価値観を養いながら、私たちは人間として、キリスト者として、そしてフランスカンとして成熟して行きます。私たちは主の御言葉を兄弟共同体の中でいただき、兄弟として福音を告げ知らせるために兄弟共同体から世界へと出かけて行くのです。アシジの兄弟フランススコに、あなたは何かと問うてみたら、彼は「自分は兄弟フランススコだ」と答えることでしょう。そして、彼の生活について話してくださいとお願いしたら、彼は、「遺言」に書きしるした言葉でもって、主の賜物について、神の御働きについて、神の恵みについて話すにちがひありません。なぜなら、主が彼を導いて悔い改めさせ、彼に教会への信仰と、聖なるローマ教会の教えに従って生活する司祭への信頼感をお与えになり、また、兄弟たちをお与えになったからです。フランススコが受けた悔い改めの恵みと信仰の単純さと確かさを無視して、祝福されたフランススコの生活を理解することができないのと同じように、主が彼にお与えになった兄弟たちの存在を無視して、フランススコの生活を理解することはできません。小さき兄弟の生活とミッションは、悔い改めの恵みなくして、信仰の力なくして、主がお与えになる兄弟たちなくしては、理解し得ないものです。

兄弟共同体の賜物は神そのものである交わりと教会的な交わりの中に根ざしています。いと高き神の御子の似姿として創られた私

たちは、いただいたキリストの霊によって、父なる神の子となり、イエスの兄弟となり、互いの兄弟となったのです。昔からの友情、互いへの思いやり、共通のプロジェクトだけが私たちを一つに結びつけるのではないし、また、そうであってはなりません。結びつける絆とは、神の命であり、私たちの心に注がれる聖霊であり、神の愛なのです。

私たちは兄弟であると言うとき、私たちは自分が召された召命について語り、神からいただいた恵みについて語っているのです。しかし、兄弟共同体は、他のすべての神学的賜物と同じように、達成すべき任務であると同時に、到達すべき目標でもあります。言葉でではなく行いによって、本物の兄弟共同体生活を送ることができるならば、また、自分の殻に閉じこもることなく、出会うすべての人々に心を開くならば、非人間化と没個性に脅かされて、共同体的な交わりを心から求めている世界の期待に応えることができるでしょう（「1973年の総集会の宣言」参照）。

兄弟的生活についてこれまでどのような進歩が見られたでしょうか。これから直面すべき課題は何でしょうか？

総集会への報告書の中でも指摘しましたが、「活力のしるし」がいくつか見られます。たとえば、兄弟共同体が提供するより兄弟的な側面とか、兄弟共同体の建設のために重要な手段を使うようになったこととか、権威という奉仕に対するより深い理解とか、より深いコミュニケーションや協力など。それと同時に、「回心への招き」についても述べました。たとえば、多くの兄弟たちの間にはびこる幻滅や懐疑主義、兄弟間の分裂、コミュニケーションの不足、個人主義の横行、マス・メディアの侵入など。最後に、「良い状態からさらに良い状態に移行する」ために取るべきと思われるいくつかのステップ、すなわち、私たちの兄弟生活が召命の要求を満たし、現代人にとって明らかな預言的証しとなるために必要と思われる「脱出」(exodus)についても述べました。共同の

生活(life in common)から生活の分かち合い(communion of life)へと移行する必要があります。また、義務中心から在り方と行動の調和へと移行する必要がありますが、効率重視から「愛」(アガペー)の喜びへと移行する必要がありますが、単純な友情や共通の利益からキリストのうちに結ばれた家族へと移行する必要がありますが、そして、ファリサイ人の態度から徴税人の態度へと移行する必要があります。

相互愛は兄弟フランシスコが重病のため語ることができずに、兄弟に書き取らせた霊的な遺言の一部であることを決して忘れてはなりません。すなわち、「彼ら(この修道会の現在、および未来のすべての兄弟たち)を祝福した私の記念として、兄弟たちはつねに互いに愛し合うように」との遺言です(シエナの遺言3)。私たちの召命とはこれ、すなわち、愛、相互愛、兄弟共同体における生活の分かち合いです。

「兄弟共同体における生活の分かち合い」について語る時、よく注意しなければならないことがあります。それは「個人主義」です。主観主義と自己実現の欲望の影響を受けた現代文化の特徴とも言うべきこの現象は、私たち兄弟の生活とも決して無縁ではありません。多くの兄弟は、「個人的プロジェクト」(personal project)と称して、「個人主義的プロジェクト」(individualist projects)を正当化しようとしています。それは、真の個人的生活プロジェクトのためのスペースがたくさんあって、いつも人を関係性の中で考えようとする真の兄弟愛に満ちた生活プロジェクトとは何の関係もありません。

兄弟共同体における生活を、具体的な日常生活とは無縁の単なる原理原則の宣言や、単なるイデオロギーにしてしまわないためには、私たちの生活様式の本質的な価値である兄弟性に、初期養成の最初の段階から生涯養成の全過程を通じて特別な注意を払う必要があります。「小さき兄弟会は兄弟会である」(会憲 1 : 1)との定義と私たちは「派遣されて宣教する使命を帯びた兄弟共同体

(*fraternity-in-mission*)」である(総評議会 2001)という定義に従うならば、二つのことが必要になります。すなわち、一つは召命の識別であり、もう一つは、宣教する兄弟会という側面を特に重視し、初期及び生涯養成において、「心からこの身を兄弟会にゆだねます」(会憲 5:2)との誓約に基づき、兄弟たちがその才能を兄弟会のために捧げるように導く養成です。そうすることによって、兄弟各人は互いに異なる個性を持った兄弟を与えられたことを恵みとして味わうことができ、自分の労働の實りを兄弟会に喜んで捧げ、兄弟会の名によって派遣された宣教の使命を実感することができるでしょう。

真の兄弟会を建設するプロセスにおいて最も重要な要素は、修道院長や管区長の役割です。なぜなら、彼らは兄弟たちに仕える立場にあるからです。修道院長や管区長は、兄弟たちが「キリストにおいて結ばれた家族」(ESa II:25、会憲 45:1 参照)のように暮らすことができるよう最大限の努力を払わなければなりません。さらに彼らは、兄弟たちの必要に細心の注意を払い、一致と共同責任を促進し、兄弟的な識別と同伴によって、兄弟各人が自分の才能を見出し、それを他者のために生かすことができるように助ける義務があります。

しかしそのためには、兄弟たちの「世話役 (minister)」として仕えるように召し出された兄弟の適切な養成が必要です。権威という奉仕がその真の福音的価値とフランスス坎的な意味を失わないためには、そして、私たちの修道院が幾分居心地のよい、しかも幾分特権を与えられた単なる個人主義的な「住居」とならないためには、この必要性は以前にも増して急務となっています。

これを実行するに当たり、兄弟共同体の建設の全過程において特に重要ないくつかの手段を決して忘れてはなりません。それは、継続性と忠実さを必要とする共同の祈りであり、兄弟的生活を企画し、評価する修道院会議であり、兄弟たちの召命の成長に責任

のある修道院長や管区長（未裁可会則 4 : 6 参照）と兄弟各人との個人的な面談と養成的な関わりとしての道理にかなった同伴です。また、個人の成長のためばかりでなく、兄弟共同体内の不正を回避するためにも必要な兄弟愛をもった矯正、修道院の維持管理の責任と院内業務の責任分担、コミュニケーション手段の適切な利用、何をしたかとか、どんなことを考え感じているかについての兄弟間の「家族的で」心のこもったコミュニケーションなども大切です。レクリエーションや食事会などの打ち解けた集まりを楽しむこともとても大切であると思います。こうした集まりを大切にしない、あるいは避けようとする兄弟が御聖体の賜物や本物の友情という賜物を味わうことができるとはとても思えませんし、親近感や帰属意識を持てるとも思えません。

親愛なる兄弟の皆さん、兄弟性という側面ではすでになんかのことが実行されていますが、まだまだなすべきことは多いというのが私の実感です。私たちの中には個人主義がはびこっています。互いに出会いを恐れているような印象を受けることさえあります。分裂があり、帰属意識は希薄で、コミュニケーションもうわべだけということがよくあります。

私たちの中にはびこる個人主義と闘うにはどうすればよいでしょうか？ 私たちの兄弟共同体を本当の家庭にするにはどうすればよいでしょうか？ 私たちの兄弟関係を温かいものにするにはどうすればよいでしょうか？ 修道院や管区や兄弟会への帰属意識を強めるにはどうすればよいでしょうか？ 私たちの兄弟的共同生活をより意義深いものにするにはどうすればよいでしょうか？ 修道院長を適切に養成するにはどうすればよいでしょうか？ これらは、この総集会の間に真剣に考えなければならない問題です。

3 . 小ささ、貧しさ、そして連帯

小ささ（内的な貧しさ、心の謙遜さ）、清貧（何も持たずに生きること）、そして連帯（他者の運命に責任を持つこと）は、共同体における兄弟的生活を特徴付け、定義づける特質です。なぜなら、それらの特質は兄弟としての私たちの在り方、教会の中で、また、世間で見捨てられた修道院の中で福音を告げ知らせる私たちの独特な生き方を示しているからです。私たちは「小さき者」の兄弟共同体なのです。

何も所有せず、連帯して小さき者として生きるとは、現代世界における私たちの生き方です。それは、フランシスコが彼の時代に福音を選び取って生きた生き方であり、「言葉と行い」（クララの遺言5）によって示した生き方であると同時に、キリストの思いを究極的に自分のものとする生き方なのです（フィリピ2：5-8参照）。

何も所有せず連帯して小さき者として生きようとすると、ある程度社会的な制約を受けます。なぜなら、ある程度外的にも内的にも剥奪された状態になりますし、すべての人のしもべとなり、すべての人に仕えて（全キリスト者への手紙 II,2 参照）他者に対して権力を振るわず、貧しい人と共にいて、世界を貧しい人の目で見ることが必要になるからです。いずれにしても、その最も深い動機はいつも絶対的に福音です。福音こそは「イエス・キリストの御跡にいっそう近く従う」ことを選んだ人の行動を示し、仕えるために「すべてを捨て」、耳を傾け、服従し、分かち合うために「謙遜になること」を意味するのです。

福音を宣べ伝え、キリストに従うということは、自分を空しくして耳を傾け、服従し、分かち合うために、自分を捨てることを意味します。しかも、神が御子を通して御自分を小さき者、何も持たない者、すべての人と連帯する者としてお示しになったのですから、何も所有せずに連帯して生きる小ささは、神に出会うための特別な恵みの場であり、従って、何も自分のために取っておか

ない人だけが、他者を受け入れ、他者に仕えることができるのです。

兄弟性と同じように、小ささも恵みであり、召命であり、務めです。小ささが恵みであり、召命であるのは、父なる神がその無限の慈しみによって、私たちを、死を受け入れるほどに御自分を空しくされた神のいとし子イエス・キリストの弟子となるように招いてくださったからです。また、小ささが務めでもあるのは、私たちが謙遜な忍耐をもって、キリストから学び、すべての人のしもべとして、また心の謙遜な平和の作り手として世界に出かけて行かなければならないからです。

決して諦めてはならないこの貧しくなることを学ぶという務めについて、私はこの総集會に宛てた報告書の中に具体的な事例を挙げました。

兄弟たち及び兄弟會のこの生涯にわたるプロセスの中には、多くの「活力のしるし」があります。たとえば、兄弟たちが「周辺地域」や「辺境地帯」、「忘れ去られた修道院」や「非人間的な修道院」へと移動する傾向が見られることです。多くの兄弟たち、さまざまな兄弟共同体、そしていくつかの管区が、福音のラディカリズムに促されて、質素で本質的な生活を選択していますし、最も貧しい人々との連帯を志向しています。多くの兄弟が正義と平和と被造物の保全の推進のために真剣に働いています。兄弟たちの間に他者との協力と連帯を積極的に推し進めようとする精神が生まれています。

報告書の中には、「回心への招き」も取り入れました。なぜなら、私たちが受けた召命はとてつもなく高く、私たちが倣うことを約束した主イエス・キリストの貧しさと謙遜はとてつもないものなので、私たちの生活のこの本質的な側面を覆い隠すようなさまざまな陰の部分の識別し、乗り越える努力をすることは重要であると思わ

れるからです。そこで、私たちを取り巻く社会環境や、私たちが生きることを約束した連帯と貧しさについて考察していただきたいと思います。

「良い状態からさらに良い状態に移行するプロセスの中で」と題した個所では、行動の指針を示してあります。それらはもちろん唯一の可能性というわけではありませんし、また、貧しさと小ささの生活を送る上で最も適切で効果的だということもありませぬ。それらは、兄弟たちが最も実践の緊急性と必要性を感じるその他の活動方針を探り当て、指摘できるようになるための出発点にすぎません。中でも特に強調したのは、次の点です。すなわち、清貧の誓願についての考えを深める必要、仕事を恵みとして引き受ける必要、個人主義的な経済から連帯性のある兄弟的で透明な経済へと移行する必要、そして、私たち自身が正義と平和と和解のあかし人となり、推進者となる必要です。

清貧は、相互愛と同じように、フランシスコが兄弟たちに残してくれた霊的な遺産です。「兄弟たちは、われらの貴女清貧を敬い、心をこめて愛し続けなければならない」(シエナの遺言4)とあるとおりです。兄弟フランシスコは、清貧を守るよう私たちに命じる前に、私たち兄弟が清貧を愛し、生涯仕える貴婦人とするようにと、その願いをはっきり述べています。心から貧しくあることに喜びを感じないならば、兄弟である喜びを体験することは決してできないでしょう。

小さく、貧しく、連帯する者であることは、自由と大きな関係があります。自由は、私たちの心を私たちのすべてであられるお方に導いてくれるからです。自由はまた、いつでも主の御旨を識別し、遂行しようとする深い献身の態度とも大きな関係があります。そして、他者と、特に最も貧しい人々との愛情あふれる交わりとも大きな関係があります。

貧しい人とは、聖書的な意味では、必然的に自己からも、物からも、他者からも解放された人のことを指します。すなわち、心を開いて、できないことは何一つないお方（ルカ 1：37 参照）に十全の信頼を置く人、自分よりも困っている人に出会ったら、自分のものは何一つないことをわきまえて、余っている物だけでなく、自分に必要な物まで分け与えることのできる連帯の人、そして特に、自分そのものを、自分に与えられた才能を、与えられた時間を分かち合い、何の報いも期待せずにしてすべてを無償で与える人、こういう人が貧しい人なのです。これこそは主をお喜ばせる貧しさです。これこそは、私たちが生きているこの世界で重要な意義のある貧しさなのです。それは、何物も自分のものとせずに生きること、主が無償でお与えくださったすべてを、そして主に属するものすべてを主と他者にお返しすることにほかなりません。

貧しく小さき者の条件と全く相容れないこととは次のようなことです。自分だけが真理を持っていると思うこと、主が私たちに求めておられる絶えざる識別の努力を怠ること、必要以上に物を溜め込み、時には資本家階級ですら持っていないような生活の安定を与えてくれる金銭や組織に頼ること、などです。貧しい兄弟であるための条件とはなはだしく矛盾することとは次のようなことです。私たちの間に時々見られる中流階級的な態度、消費主義、不透明な会計と「共同体に属さない個人口座」、権力闘争、そして、私たち全員が同じ「生活様式」を誓約したにもかかわらず、可能性や経済面でえこひいきや不平等があることです。互いに、また他者と連帯していないならば、私たちは貧しいとは言えませんし、小さき者であるとも言えません。連帯するということは、与えると同時に受け取るということなのです。

この清貧の問題について考えているうちに、ポワチエの聖ヒラリーの言葉が思い浮かびました。皆さんにご紹介しますので、味わっていただきたいと思います。「私たちに迫害する皇帝はいませんが、私たちはもっと狡猾な迫害者と戦わなければなりません。そ

れは、私たちに愛情を示し、背中を鞭打つことをせず、むしろお腹をさすってくれる敵です。彼は、私たちの持ち物を取り上げるどころか、生活に必要な物をすべて与えてくれ、物で満たしてくれますが、それは私たちを死に導きます。彼は、私たちを奴隷にしたり、投獄したりしませんが、しがらみを愛するように仕向けるのです。彼は、心を攻撃することはありませんが、心を奪ってしまいます。彼は私たちの首をはねることはしませんが、お金で私たちの魂を殺すのです。」

清貧の誓願と小さき者としてのあり方を現代社会の中で意味のある分かりやすいものにするには、どうすればよいでしょうか？本当に困っている人に会い、彼らと本当の意味で連帯するには、どうすればよいでしょうか？現代にはびこる消費主義に染まらないためには、どうすればよいでしょうか？

4 . 福音化 ミッション（宣教・派遣・使命）

本会が兄弟たちに示した「キリストの弟子として兄弟である世界に仕える」という優先課題の中で、福音化 ミッションに関する個所は、恐らく、最も分析され、具体的な評価を受けているように見えるかもしれませんが。また、最も緊急に必要な改革が実施されているように見えるかもしれませんが。しかし、その印象は誤りです。福音化 ミッションの問題は、司牧職を効率よく達成することではなくて、主から受けた「命令」なのです。つまり、私たちはイエス・キリストの使者であり、宣べ伝えるべき福音の、救いのメッセージの使者であり、建設すべき神の国の使者なのです。「イエスは彼らを呼び寄せられた。それは彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教させるためであった（マルコ 3:14）。私たちは神に呼び寄せられ、小さき兄弟として現代の人々のもとに派遣されたのです。

「神の示しを受けて」(未裁可会則 2:1) この生活に入ることを望んだ私たち小さき兄弟は、私たちの主イエス・キリストの福音を守ることを「会則と生活」としています(会則 1:1)。それと同時に、私たちは自分の使命が、フランシスコと同じように、「この世界をキリストの福音であまねく満たすこと」(1 チェラノ 97)であると感じています。「私たちの主イエス・キリストの足跡に従いつつ」(未裁可会則 1:1) 私たちは自分の使命、すなわち教会と世界に存在する理由が、福音を生き、すべての人々、特に「貧しい人々」、「捕われた人々」そして「目の見えない人々」に福音を告げ知らせることであることを知っています(2003年総集会総括文書 37 参照)。

従って、福音化について語るということは召命について語ることであり、教会と世界における自分の存在理由について語ることなのです。ミッションは一つです。つまり、ひとり子を世に遣わされた父なる神のミッションであり、使徒たちを派遣されたひとり子のミッションです(マタイ 10 以下参照)。私たちは洗礼を受けた者として、また、フランシスカンとして、聖霊の恵みをいただきながら、全教会に委ねられたミッションを分かち合うことによって福音を生き、告げ知らせるために派遣されています。「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい」(マタイ 28:19)。

ミッションが単なる教会の活動ではなく、その存在自体に関わるものであるならば、福音化はフランシスカン共同体の生活における単なるもう一つの任務としてではなく、キリスト者としての召命をその深みにおいて表す任務として考えるべきです。福音化は遂行すべき使命ではなくて、私たちの存在理由なのです。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと」(ヨハネ 15:16)。

その方向に私たちの「背中を押して」くれるのは聖霊です。私たちはその「後押し」に答えなければなりません。ですから、福音化を小さき兄弟の召命として語るとき、私たちは司牧的な必要を満たすことを言っているのではなく、召し出しに答えることについて語っているのです。それは、神と人間との深い対話から生まれる応答、父なる神の福音そのものである主によって人々のもとへ派遣されたことへの気づきから生まれる応答、神の国を各兄弟の心の中で受け入れることによって生まれる応答なのです。

私はこの総集会への報告書の中でいくつかの「活力のしるし」を指摘しました。たとえば、兄弟たちが「派遣されて宣教する使命を帯びた兄弟共同体」を形成している事実気づくようになったこと、福音化 ミッションが私たちの存在理由であることに私たちがいっそうはっきりと気づくようになったこと、こうしたことのお陰で、私たちが新しい形の福音化を求めようになり、兄弟たちの生活による証しこそ最も重要で本質的な福音化の形であることに気づいたことなどです。私たちの兄弟会は、人種、言語、文化、地域の別なく、すべての人に会い、いつもそばにいて仕えるために、もっと遠くに出かけるように招かれていると感じています。

私はこの総集会への報告書の中で「回心への招き」についても述べました。なぜなら、回心と言う私たちの生活の本質的な面においては、まだまだなすべきことがたくさんあるからです。特に問題なのは、フランス人独特の精神をもった福音宣教プロジェクトが欠けていることです。質の高い福音宣教のために兄弟たちを養成することが必要ですが、それが充分になされていません。

福音宣教という私たちの生活の根本的な側面においても、私たちは良い状態からさらに良い状態へと移行するように招かれています。私たちはすべての人に福音をもたらす新しい方法を見出すように招かれています。また、私たちの福音宣教が福音から始まり、

受肉された御言葉、すなわち、父なる神から人類に与えられた福音であるイエス・キリストを中心とするべく働くように招かれています。私たちは「愛の生きた証し人」となるように招かれています。なぜなら、福音のラディカリズムを实践する愛は、神の現存を最もはっきりと示すものであり、最も多くを問いただし、より容易に信仰の宝を発見できるように導いてくれるものだからです。私たちは「愛の想像力」、「使徒的創造性」を刺激して、「新しい形の福音宣教」を探し求めるように招かれています。福音宣教活動プロジェクトから福音宣教をフランスカン化するプロジェクトに移行する必要があります。また、自己中心的で自分の殻にこもり、自分の管区の緊急の必要を優先的に対処しようとする傾向、そして、「諸国の民への」ミッションに取り組む会の必要に応じて人材や資源をいつでも差し出す心構えが鈍りがちな傾向を克服する必要があります。

私たちの主イエス・キリストの福音を愛するならば、私たちはその福音を自分の生活と言葉に生かし、言葉と行いを通してすべての人々に告げ知らせることができるはずです。それは彼らが、私たちへの愛ゆえにすべてをお与えくださった主を知り愛するようになるためです。

福音化とミッションについて語るにあたり、皆さんに緊急に訴えたいことは、惜しみなさ創造性、そして、他のフランスカン家族の会員や信徒との緊密な協力です。

惜しみなさは、本会の宣教プロジェクトに対する惜しみなさです。昔から続いている聖地とモロッコのプロジェクト、かつてのアフリカのプロジェクト、また、ロシア - カザフスタン、タイのプロジェクト、今日のミャンマー、スーダン、ナミビア、ブルキナ・ファソのプロジェクトに対する惜しみなさです。本会が新しい宣教地に拠点を築き、私たちのミッションに忠実であろうとするならば、新しい宣教プロジェクトを受け入れる必要があります

が、そのためには、宣教師が必要です。これらのプロジェクトへの召命は、ありがたいことに少なくありませんが、これまでのやり方や組織を守ろうとする熱意が、兄弟たちの「宣教師」としての召し出しへの応答を妨げることが時としてあります。そこで各管区にお願いしたいことは、自分たちの必要に対処することばかり考えないでほしいということ、そして、「若い」管区にお願いしたいことは、若い管区ができたのは、他の管区の惜しみなさのお陰であることが多く、今度は彼らが他の管区に「お返しする」番だということを忘れないでほしいということです。すべての管区は、少なくとも二名の兄弟を「諸国の民への」ミッションのために送り出すべきです。

創造性は、新しい福音宣教の要求に応えるために必要なものです。世界は刻々と変わって来ていますし、これからも急速に変わって行くことでしょう。このような情勢においては、これまでのやり方を続けるだけで満足してはなりません。新しいニーズに対しては、新しい対応が求められます。新しいぶどう酒は新しい皮袋にいれなくてはなりません。各管区は、創造的な忠実さによって新しいアレオパゴス（宣教の場）で存在を証しする兄弟共同体を少なくとも一つ持っているべきです。そうすることによって、現代の新しいニーズに応えることができるでしょう。そこで、福音と私たちの生活様式の根本要件に基づいて時のしるしに応えるために、識別を怠らぬよう皆さんにお願いいたします。

フランスカン家族や信徒との協力。フランスカン家族のすべての会との協力が必要です。フランスカン霊性は、家族のひとつだけに世襲される財産ではないのです。フランスコはすべての人のものなので、会や歴史的なグループを超越していることは明らかであり、従って、フランスカン家族間及び「新しい」フランスカングループとの対話と協力は、今日絶対に必要です。それは私たちが家族となるためにも、また、世界と教会がフランスコの弟子に求めているしるしとなるためにも必要不可

欠なのです。さらに、信徒との協力は、多くの分野で不可能を可能にするために必要なだけでなく、時のしるしに應えるためにも必要です。信徒は教会の中で、また、福音宣教のために独自の立場を持っています。私たちは彼らの立場を認識するパイオニアとならなくてはなりません。そのためには、彼らに適切な養成を施し、適切な責任を分担させることが必要です。この分野では、いくら努力してもしすぎるということはないでしょう。対話と協力はいつも不足しがちなものです。

新しいアレオパゴス（宣教の場）で存在を証しするためには、福音宣教の分野でどのような心構えを持っていればよいでしょうか。会の宣教プロジェクトのニーズに應えるにはどうすればよいでしょうか。

5．養成と学問

ここで述べる養成とは、自分の召命により忠実であろうとし、主により従順に仕えることを求め、教会をより無条件に愛し、福音をより忠実に実践しようと不断の努力をする信仰者の態度として理解される必要があります。

兄弟たちの人間的・靈的成長、兄弟共同体の生活の刷新、私たちのミッションの信頼性のために必要と思われる何事も、養成の分野に心を配らずしては不可能です。養成は、個人的にも、また、兄弟共同体としても生涯続けられるものであり、その中で、各人の才能、福音的証し、召命の選択が継続的に発展して行くのです。養成とは回心の過程であり、忠実さを必要としますから、私たちは奉獻した人として、また小さき兄弟として、養成において自分のあり方と行動のすべてを賭けるのです。

聖書の言葉の中で「心」という言葉の持つ最も深い意味において、心の養成だけが、私たちに召命の偉大さとすばらしさを徐々に発見させてくれ、イエス・キリストの現存（生きた顔）に魅せられ

る体験をさせてくれるのです。堅固で総合的な養成だけが、私たち兄弟に現代社会や人類から発せられる呼びかけに応えさせてくれるのです。養成によって、フランシスカン生活の意義は高められ、「すべての人の目から見て」永遠に新しい預言的なしるしとなるのです。ただしそれには条件があります。つまり、養成が総合的なものであり、多様な社会文化的な状況と調和したものであること、三位一体の交わりの神秘に根ざしていること、イエス・キリストと福音への忠実さ・教会とその使命への忠実さ・修道生活と私たちのカリスマへの忠実さ・人類と時のしるしへの忠実さという四つの忠実さを兼ね備えていること、そして、生活に応用できるモデルを基礎として計画されることです。

養成と学問の分野においては、たくさんの「活力のしるし」が見られます。兄弟会は、養成と学問を他の優先課題の目標を達成するのに不可欠の条件と考えて、これに特別な注意を払ってきました。フランシスカンの召命への忠実さについて語るとき、決して終わりのない養成の一つの過程として語るべきです。養成を生涯続く回心のプロセスと捉えるこの新しい考え方によって、生涯養成を初期養成の「腐葉土」として、すべての兄弟の生活の中で、また人生のあらゆる段階で最優先すべきだとの認識が芽生えました。養成は総合的で、一人一人の個性に合ったもの、生涯的なもので、経験に根ざしたもので、徐々に進歩して行くものでなければなりません。フランシスカンの源泉資料に対する理解が深まったことにより、私たちはフランシスカン的な養成の必要性和緊急性を認識するようになりました。つまり、創立時の精神の養成にとどまらず、フランシスカンとしてのカリスマ的、霊的、哲学的、神学的伝統についての知識を深めるような養成の必要です。最近の経験から、養成にはいくつかの基本的な方法があることが分かりました。たとえば、養成担当者の適切な養成。養成担当者が自分に委ねられたデリケートな職務（奉仕）のために十分な備えができるように計らい、できるだけ行き当たりばったりの任命を避けるとか、養成担当者が一人で責任を負うのではなく、共同体全体で養成に関わるような兄弟共同体を作るとか、養成と学問のコーディネーターとして、また、会全体、管区・分管区の中で、それにつ

いて考えさせる推進者としての「養成学問担当主任（養成事務局長）」を配置するとか、生涯養成担当者を配置するなど。

報告書は「活力のしるし」のほかに、いくつかの「回心への招き」についても指摘しています。なぜなら、これまでさまざまな努力を重ねてきましたが、目標はまだまだ遠いからです。

生涯養成の任務、すなわち、兄弟たちの知性を磨くだけでなく、心と情緒をも耕し、各自の生活に影響を及ぼすような養成を推し進めるためには、まだまだなすべきことがたくさんあります。私たちの養成はあまりに観念的で実用性に欠けています。私たちの養成は知的レベルではよくできていますが、心や情緒の面が不足しており、日常性に欠けています。召命の司牧的配慮に関しては、まだまだなすべきことがたくさんあります。私たちは「人数や効率だけにとらわれず、召命の真正さと動機の純粹さを信仰の光に照らし、否定の可能性も含めて確認するために、平和な心で識別しなければなりません」(キリストからの再出発 18)。人数にこだわったり、「空き」を埋めようと焦ったりすれば、私たちのもとにやってくる志望者を平和な心で識別することはできません。時間が経てば変わるだろうという誤った希望をもって、ふさわしくない志望者を修道生活に招き入れてしまうことがよくあります。他の修道会にいたことのある志望者を良く調べもせず簡単に受け入れてしまうこともめずらしくありません。一度退会した人が再入会を希望する場合、その人の修練期を免除してほしいとの要請も数多くあります。また、多くの場合、志望者を深く理解するために必要な、一人一人に見合った霊的同伴が欠けています。これらのことが重い付けとなって溜まっており、将来さらに付けは重くなって行くのではないかと私は危惧しております。フランスカン生活を救うのは人数ではなく質なのだということを、いつになったら私たちは認めるのでしょうか。

以上のことに関連して、すでに言及した「キリストからの再出発」からさらに次の言葉を引用したいと思います。「私たちが生きている慌ただしい時代には、養成目標の実現をねばり強く忍耐しながら

ら待つことがこれまで以上に求められています。この慌ただしさと浅はかさがはびこっている環境においてこそ、平静さと深さが必要なのです。なぜなら、実際には、人間というものはゆっくりと完成されていくからです」(18)。

このように考えてくると、志願期の段階を真剣に考えることが急務となります。2003年の総集会では、志願期を12ヶ月とし、志願者の人間的な成熟と、キリスト者としての養成と、召命の動機の深い分析に焦点が当てられるべきことが定められました。

養成という奉仕職に招かれている兄弟の育成に関しては、まだまだなすべきことがたくさんあります。養成担当者を育成する必要は痛感されているが、これまでこの必要に適切に応えることができていません。新しい召命を受け入れたいと願うすべての管区にとって、この問題は優先課題です。キリストの弟子となることのすばらしさを伝えることができ、私たちのもとにやって来る兄弟たちを同伴することのできる養成担当者を育成するというテーマを優先課題として取り上げないならば、初期養成の問題と特に重要な召命の堅忍の問題を解決することはできないでしょう。私たちは次のように自分に問うてみなければなりません。養成担当や召命担当に携わっている最中に退会する兄弟が結構多いというのは、何を意味しているのでしょうか？自分の召命による人生の選択を明らかにできなくて、どうやってフランスカン生活を形成することができるのでしょうか？養成担当者の育成にもっと注意を払い、養成の過程において同伴するように招かれている兄弟の選別にさらなる配慮を怠らないことが必要です。

もう一つの「回心」への招きは、兄弟たちの知的養成に関連しています。これは現代社会が要求していることではないかもしれませんが。私たちは、若い兄弟たちが自分の信仰や希望の正しさを認め、自分の召命による選択の正しさを認め、自分の存在を賭けた誓約の正しさを認め、この世界における自分のあり方の正しさを認めることができるよう、彼らに十分な知的養成を施していないように思います。現代の教会が、またそれに伴いフランススコ会

が抱えている最大の問題の一つは、多くの司祭と（私たちの会では）兄弟たちが直面している文化的な危機ではないかと私は考えています。この危機は、現代社会にはびこっている「虚無的な文化」に取って代わる積極的なものを私たちから奪い、さらに厄介なことには、多くの場合私たちを虚無的な文化の犠牲者にしてしまう可能性があります。

兄弟一人一人の状況や性格、知的能力、資質、傾向などを考慮に入れて、司祭を志す兄弟とブラザー（修道士）を志す兄弟に共通の基本的養成を施す必要があることをここで再確認することはとても大切です。

兄弟たちの活動分野は多岐にわたっていますが、それぞれの活動に取り組む動機もまた多様です。養成はその性質上、未来を志向しています。だからこそ、養成は複雑で厳しいプロセスを抱えた問題や困難を意味するだけでなく、活力、創造性、新しさ、人生の約束、未来の保証をも意味しているのです。良い状態からさらに良い状態に移行するために探求を続けなくてはなりません。忠実であるように、自分に与えられた賜物を大切にするように、責任感を持ちながら自由であるように、そして、キリストへの情熱と人類への情熱を持つように養成することが必要です。

現代のニーズに合った養成を施すためには、養成と学問の分野でどのような具体策を講ずるべきでしょうか？この優先課題に関してここ数年本会が成し遂げてきた刷新をこれからも続け、強めるためにはどうすればよいでしょうか？

未来に向かって：夢を見、行動する時

神体験という堅固な岩の上に私たちの生活様式とミッションを根付かせるために、また、兄弟たちにフランスカンである喜びを感じさせるために、具体的な活動方針を作成しなければなりません。そこで、私たちが生きているこの恵みの時に、私たちに緊急に求められていると思われる態度についていくつか指摘したいと思います。

1．識別の時

最初にも述べましたが、私たちは危機的な時代に生きています。それは、世界的にも、また、特に昔からキリスト教やフランスカンの伝統が連綿と続いている国々では、社会やフランスカンの奉獻生活が根底から急速に変貌する時代です。

表向きは穏やかですが、内部では個人的不安が渦巻き、自分の生きていることに意味を見出すことができず、自分が何者であるかも分からず、不確かな未来に不安を抱いていることが多いのです。従って、今必要なことは、個人として、また共同体としての選択を明確かつ大胆に識別することです。それによって、私たちの生活のクリスマ的な基盤を再建することができ、福音に出会う、つまり、福音化されることができ、私たちの生活の預言的な側面を回復し、隣人である人々に福音をもたらすことができるでしょう。

何度も繰り返しているように、私たちは危機的な時代に生きています。しかし、どのようにしてそれを識別することができるのでしょうか？それをどのように位置付けることができるのでしょうか？それとどのように立ち向かうべきでしょうか？

危機に直面した時の私たちの態度は千差万別です。たとえば、a) 危機など存在しないかのように振舞うとか、b) 外的な要因だけで説明するにとどめ、自分には関わりのないことにするとか、c) 前の「現状」を回復したい一心で行動するとか、d) 起こっていることの意味を探し求め、日和見的な決断を下さないで、私たちのカリスマと現代が突きつける挑戦に照らして、時のしるしを識別するなどです。

この危機的な時代に私が抱いている夢をいくつか皆さんにお話しましょう。

聖人たちの業績を称えるのではなく、私たちの魂の良き牧者である主を見つめ、艱難と迫害、恥辱と飢え、弱さと誘惑において主に従う(「訓戒の言葉」6 参照)ようになることを願い、希望し、求めています。

疲れと幻滅と懐疑主義を克服して、自分の責任を引き受け、神の御計画に従って未来を建設するために働き、現在をよそ者として、寄留者として、また信仰によって、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行く旅人として(ヘブライ 11: 8、13 参照) 生きることを願い、希望し、求めています。

目の前から消えてしまった過去の世界に対する郷愁から癒されて、聖霊の力をいただいて、新しい世界、より良いふるさと、遠くからでも見ることのできる未来(ヘブライ 11: 13 参照) に向かって出発することを願い、希望し、求めています。

私たちの生活様式への創造的な忠実さを保ちつつ、時を識別し、新しい形の生き方や宣教使命を識別することに献身している兄弟たちが、その意思を衰えさせることなく、現代は種まきの時期であり、今日蒔いた種は明日には実ることを知って、仮にその実を味わうことがなくても、満足することを願い、希望し、求めています。

2. 愛とあかしの時

私たちは当然のこととして、また必然的に、私たちの生活様式の「正統性」を守ろうとこれまでずっと努力してきました。この努力は、自分たちこそは最もすぐれているという優越感の結果、一度ならずも攻撃と断絶を生みました。私たちは当然のこととして、また必然的に、私たちの生活様式のすばらしさと徹底主義を強調してきましたが、その結果、私たちの生活と価値観を一つのイデオロギーに貶めるというリスクと、生活を宣べ伝えるということとイデオロギーを宣べ伝えるということを混同するというリスクと、そして、体験を、美しくても現代人の心に届かない様式に置き換えるというリスクを冒してきたのです。

今は、スローガンや響きの良い言葉で満足すべき時ではありません。今こそは、愛とあかしの時です。今こそは、信じるのが困難で、しかも頭だけは満たしてくれるが心は満たしてくれないイデオロギーや演説に懐疑的なこの世界に私たちを近づけてくれる道筋を開く時なのです。あかしとなり心から愛する者だけがこの世界で正統な発言権を持つ時が来たようです。現代世界は、教師よりもあかし人を必要としています。今はまた、愛とあかしのために私たちの生活を、語のあらゆる意味において「福音化」し、知識を深める時なのです。

ここでも再び、私の夢を申し述べたいと思います。

私は、兄弟たちが独占的な愛ではなく、自己犠牲的な愛で愛し合うような兄弟会を夢見ています。そのような愛は、自分の殻を破り、自分を超えて、自己と和解するように、そして神と他者に出会うように導いてくれるからです。

私は、私たち兄弟の生活が主イエス・キリストの福音にますます合致したものとなるような兄弟会を夢見ています。そこ

では、兄弟たちの行動が教えに矛盾することなく、兄弟たちが日を重ねるごとにさらに本物となるような兄弟会です。私は、兄弟たちが「自分の目を見たもの、よく見て、手で触れたもの、すなわち、命の言葉について」(1ヨハネ1:1)まことのあかし人となるような兄弟会を夢見ています。私は、兄弟たちがイエスの生き方の新鮮さ、「最も小さき人々」との触れ合いの新鮮さ、父なる神(Abba)の激しい愛の新鮮さを私たちの生活に再び浸透させることができるような兄弟会を夢見ています。私は、兄弟たちが神と人類に対する愛と情熱の緊急性を感じることができるような兄弟会を夢見ています。

3. 質問と提案の時

私たちキリスト者は、世間の人々に一つの絶対的真理を訴えることはできません。なぜなら、現代社会ではさまざまな思考がそれなりの真理を持っているからです。ポストモダンの人々にとって、言葉はもはや永遠の真理を伝えるものではなく、数ある意見のうちの一つを伝える気まぐれな手段に過ぎません。キリストを信じる私たちは、そうした人々の心を捉えるためには、既存の真理ではなく、自分も探し求めている真理、疑問を抱いている真理、確信がもてないでいる真理を伝える必要があります。なぜなら、私たちは探し求める人々と共に探し求め、尋ね歩く人々と共に尋ね歩き、不安を抱える人々と共に不安を共有しているからです。そして私たちは、そのような「意見を持つ人々」を、神が愛されるがゆえに、愛するのです。

現代は、対話の時、提案の時であって、押し付ける時ではありません。現代は、小さき者の態度で生きる時、生きて学ぶ時、多くの声の中の一つにすぎない、真理に飢え渴くただの兄弟であるべき時です。現代は、旅の途中にいる兄弟であるべき時、自分が探

し求めている真理、疑問に思っている真理、恐れと不安を抱いている真理を伝えるべき時なのです。

「この時」に忠実であるために、私は会が次のようであることを願ひ、望み、求めます。

私たち兄弟が探し求める人と共に探し求め、尋ね歩く人と共に尋ね歩き、自問する人と共に自問するような兄弟会；

私たち兄弟が不安を抱える人とその不安を共有できるような兄弟会；

私たち兄弟が対話を教会と会の真のミッションと考える事が出来るような兄弟会；

私たち兄弟が自分自身を、世界に伝える言葉とし、メッセージとすることを急務と感じられるような兄弟会。

4 . 自由とおおらかさの時

効率、生産性など、現代人はこれらの犠牲者です。そして私たちもまた然りです。私たちは生産高と実用性が疑問の余地のない「ドグマ」とされている価値体系の奴隷となっています。私たちは機能性の奴隷なのです。すべてが役に立たなくてはなりません。私たちは実際、奴隷のように捕われた世界であたかも自由であるかのように信じ込ませる重大な欺瞞の犠牲者なのです。

今こそ自由とおおらかさの時、連帯と真の交わりを学ぶ時です。連帯と真の交わりは己の利益を顧みない自己犠牲から生まれます。今はまた、本当の意味で私たちを自由にしてくれる真理と誠実さを身に付ける時でもあります。

ここで、再び私の夢と願いを申し述べたいと思います。

私たち兄弟が貢献の度合いによってではなく、ありのままに互いに心から愛し合うことのできる兄弟会；

私たち兄弟が人間関係において自由とおおらかさを体験できるような兄弟会；

私たち兄弟が、真理と愛のみがもたらす自由のうちに、幸せに生きることができるような兄弟会；

私たち兄弟が、仕事に追われることなく、また、重圧で神経が疲れることなく、生活とミッションにおいていっそう大きな「活動の自由」を持つことができるような兄弟会。

5 . 交わりと兄弟愛の時

私たちは断絶と恐れによって分断された世界、しかし交わり（分かち合い）と兄弟愛を渴望する世界に住んでいます。また、私たちの住んでいるこの世界は緊張が絶えません。兄弟愛は私たちの生活様式の本質的な要素ですが、本当の意味で兄弟でいるということは難しいことです。私たちは兄弟愛と分かち合いの必要性を感じていますが、それらを打ち立てるよりも、消費していることの方が多いのです。私たちは兄弟であり、会のことを兄弟会であると宣言しながら早くも分裂しています。イデオロギーによって引き裂かれ、民族の壁や世代の壁を作っています。

今は兄弟愛と交わりの時です。兄弟愛と交わりは、いくら築いても完成することのないものです。兄弟愛と交わりは、人間の弱さと和解とゆるしと慈しみの上に築かれるものであり、兄弟的生活を再生させるためには、自己犠牲と無私の心が必要です。兄弟愛と交わりは、会員同士の喜びに満ちた真に兄弟的な関係によって支えられるものです。兄弟愛と交わりは、人間としての徳を磨き、広く深い交わりを育むことによって、また、個人としてかつ共同体としての祈りを通して養われるものであり、その中心には常に神の御言葉と御聖体があります。

私が願い、希望し、求めているものとは、

私たち兄弟が交わりと他者受容と自己犠牲の持つ限りないエネルギーを共有し生かすような兄弟会；

私たち兄弟が自分の過去を打ち明けたり、親密さを分かち合ったり、信仰や聖霊の恵みを分かち合ったりすることを恐れなくなり、その結果、兄弟たちが信仰を伝えあうことができるような兄弟会；

私たち兄弟が互いに相手を「主からいただいた賜物」として受け入れ、共通の救いを体験することができるような兄弟会；

私たち兄弟が自分の意見を述べ合い、進捗状況を検討・評価し、共に考え計画するような兄弟会；

私たち兄弟が神の愛と互いに対する愛とに基づく深い友情を体験し、それによって、互いの傷をゆるしのぶどう酒と和解の油でもって癒すことができるような兄弟会；

私たち兄弟が互いに負い目を持っており、一つの家族となるように召されていると感じ取ることのできる兄弟会。家族となることによって、私たちは一つに結ばれ、絶えざる倦むことのない深い愛によって愛され、心にかけていると実感することができます。

私たち兄弟が自分の召命とミッションの賜物をいつも祝うことができ、共にいる喜びと「キリストのうちに結ばれた家族」を形成する喜びを体験することのできる兄弟会。

6．協力の時

2003年の総集会では、「管区間の協力」が「未来を支えるもの」であるとして、優先課題として指摘されました。兄弟ヘルマン・シャルックは、1992年に「共通の未来を支える連帯の文化」を身につける必要性について語っています。

この協力と連帯の文化は、困っている管区を助けるのに重要なだ

けでなく、兄弟的生活のあかし (signum fraternitatis) となるようにとの私たちの召命に応え、その召命を教会と世界の中で生き抜くためにも重要なものです。

この要求に応えるために、私は次のことを願い、希望し、求めます。

諸管区が平等に、管区間のつながりを受け入れ、会の普遍的な精神を再生して、会への帰属意識を強めることができるような兄弟会；

連帯と管区間の協力の文化が、養成と学問において生かされ、また、「諸国の民への」ミッションにおいても、分裂した場所においても、共通のプロジェクトにおいても生かされるような兄弟会；

諸管区が、兄弟数の最も少ない管区をも含めて、会全体の活動やプロジェクトに参加するために、自分の管区の兄弟を惜しみなく差し出す用意のある兄弟会。

7 . 再編の時

人数が減っている現代においては、特にある管区では、組織によって窒息させられたくないと思うならば、また、それによって生活が振り回され、カリスマが低下するのを防ぎたいならば、一致団結する時であり、再編する時でもあります。

多くの管区が、兄弟の人数の減少や高齢化のために、たった数年前に維持できていた状況を維持できなくなっています。時には、強化するために組織を閉じる必要も出てきます。それだけでなく、新しい要求が新しい応えを求めているのです。新しい応えを出すためには、今のあり方や活動を一部再編する必要があります。その場合、新たに開くために、閉じる必要があるのです。

ここで再び皆さんに私の願いを申し述べたいと思います。

時のしるしと場所のしるしに注意を払いながら、私たちのあり方と活動を真剣に識別するように願い、希望し、求めます。あり方と活動を見直すこの時に、私たちの召命への応答と福音的な生き方を個人としても、また、組織としても活性化させることが優先されることを願い、希望し、求めます。

あり方と活動を見直すこの時に、自分の利益を考えるのではなく、人間のすばらしさと尊厳が絶えず傷つけられている「忘れられた、非人間的」な修道院のことを考えるように願い、希望し、求めます。

8 . 統合と融合の時

さまざまな管区の抱える弱点が、フランシスカンプロジェクトの推し進める目標の達成を阻むことがあります。そのような場合、新しい組織を作って、いくつかの管区を統合することも可能です。召命の未来が危うくなったような時には、時を移さずに、統合や融合に取り掛かるべきです。統合や融合を首尾よく成し遂げるには時間がかかるからです。このようなことを行ったことは会の歴史の中でも、一度ならずありました。

このようなプロセスを、死が進行している結果だと考えてはなりません。否定的なプロセスの結果と捉えるべきではないのです。むしろ、より大きな協力の可能性が生まれたしるしとして、また、フランシスカンの生活とミッションの復活のしるしとして捉えるべきです。

これは必ずしも容易なことではありませんが、これしか方法がない場合もあるのです。従って、私は次のことを願い、希望し、求めます：

消滅するまで統合を待たったりしないこと；

これらのプロセスを信仰の視点からじっくりと時のしるしと捉えること。これらのしるしを通して、歴史の主は私たちに語りかけてくださるのです。

9 . 連結の時

すでに述べた状況のほかに、会は少なくとも人間の目で見れば、はるかに明るい未来を持った状況も体験しています。たとえば、できたばかりのために存在感は薄いですが、召命の前途は明るい国々があります。そのような場合には、他の面でもゆとりのある管区がこれらの新しい拠点を援助します。このようにしてこそ、新しい拠点が強化され、それなりの道筋を整えて、後日に助けてくれた管区に恩返しをすることができるのです。

このようなプロセスについて、私は次のことを願い、希望し、求めます：

財政的にゆとりのある管区は、困っているが恐らく召命はもっと多い管区を助けるために、連帯基金（solidarity fund）などによって協力すること。これは、新しい土地における会の活動に協力する一つの方法です。

人材に恵まれた管区は、こうした会の新しいプロジェクトに人員を送り込むことをためらわないこと。特に養成の分野での援助は重要です。

新しい管区が、明確なフランシスカンの福音生活プロジェクトを持ち、私たちの「生活様式」から生まれる優先課題を最優先することによって、強化されること。

結論

親愛なる兄弟の皆さん、私は以上のように希望と心配を皆さんに打ち明けました。会全体の希望と心配をまとめ、表現しようと努めてまいりました。そして、兄弟たちの心を捉えるような言葉を選んだつもりです。彼らが自分の受けた召命の喜びを感じ、その召命の恵みが各自の中で豊かに実るように成長させる責任をも喜んで感じることができるようにとの願いを込めて。今私は、全兄弟会を一人の人間として見たいと思います。サン・ダミアーノの十字架上のキリストの御前で、それまで以上に真剣に神の慈しみを求めて、心の底からの願いを熱心に祈っている一人のアシジのフランシスコとして見たいと思うのです。「この上なく高く、栄光に満ちておられる神、私の心の闇を照らして、正しい信仰、確かな希望、そして、完全な愛を、更に、理解と認識をお与えください。このようにして、主よ、あなたの聖にして真実な掟を私が実行できますように。」

親愛なる兄弟の皆さん、私はヴァクラヴ・ハヴェルの次の言葉を自分のものとして、心に刻みたいと思います：

「希望は将来大きな成功を遂げるだろうとの確信から
力を得るものではありません。
そうではなくて、
私たちの志しが、あらゆる打算を越えて、
意味に満ちているという確信から
力を得るのです。」

さあ、沖に漕ぎ出しましょう。

総長 兄弟ホセ・ロドリゲス・カルバッリヨ ofm

主は道々わたしたちに話して下さる

臨時総集会総括文書

ラ・ベルナ - アシジ

2006年9月15日 10月1日

、

2006年 ローマ

プレゼンテーション

親愛なる兄弟の皆様

主が平和をお与えくださいますように。

臨時総集会は2006年9月15日にラ・ベルナの聖堂（Sanctuary）で始まり、天使の聖母聖堂で続けられ、10月1日にポルチウクラで閉会しました。この総集会は、私たちの生活と会則の教皇イノセント3世による裁可800年記念、すなわち、会の創立800年記念の準備の重要な一段階でした。

「神の示し」に促された私たち小さき兄弟は、創立時の精神に向き合い、「主よ、今日の小さき兄弟である私たちに何をお望みですか」との問いに答えるために、アシジに戻りました。すべての兄弟およびすべての管区は、その答えを総括文書「主は道々わたしたちに話してくださる」に見出すことができます。この文書は、「助言であり、体験であり、道であり、派遣であり、絶えず開かれた招き」(n.3)であると同時に、私たちのカリスマを、私たちの主、慈しみの御父から生きるべく与えられたこの現在という時に実践するための助けであり、支えであり、励ましであります。

総理事会の承認を得て、今日皆様お一人お一人にお渡しするこの文書は、二部構成になっております。第一部は、「新しい発想を促す」ためのものです。それは「明晰さと大胆さ」をもって旅するように主が招いてくださっている現代の道を歩むための動機、援助、光、手引きを与えることを主眼としています。第二部は、方法論、助言、方向付けを示しています。全兄弟会および各兄弟共同体が同じ道を辿ることによって、手順やスタイルは違っていても、「私たちの記憶と創立の祭壇」(n.7)をしばしば訪れて理解と直観を深め、それを日常生活の中で具現することができるよう

に配慮しています。

親愛なる兄弟の皆様、総括文書「主は道々わたしたちに話してください」は、この臨時総集会在各兄弟および各管区においても継続されることを求めています。主と師父フランシスコが旅を続ける私たちを助けてくださいますように。そして、私たちがこの道をエンマウスの弟子たちと同じようなやり方で歩み、私たちの生活とミッション(派遣されて宣教する使命)をよりよいものにする方法を識別することができますように。そして、私たちが「取るに足りない単純なしるし、人々の闇夜に静に瞬く一つの星として、命の本源へと導く」(n.9)者となれますように。

2006年11月1日、諸聖人の祝日に、ローマにて。

総長 兄弟ホセ・ロドリゲス・カルバッリヨ ofm

Prot. 097353

序文

1. 2006年の臨時総集会は2009年に行われる小さき兄弟会創立800年祭を控えて開かれました。この文書は孤立したのではなく、創立の恵みを祝う光のもとに読まれるように作成されました。したがってこの文書は、時代の変化によってもたらされるチャレンジの中で、わたしたちのカリスマをどのように適応させていこうかという模索の光のもとに読まれるように意図されています。この脈絡の中で、福音、そしてフランシスコが教皇インノセント三世に提示し、ホノリオ三世によって認可された会則と生活¹とがわたしたちの基準になるのは驚くにあたらないでしょう。この文書はわたしたちが今まで行ってきた諸考察をしっかり保っています。² 特に総集会への総長報告書「明晰さと大胆さをもって」は、福音と会の創立の諸源泉を明晰大胆に再読したものです。

2. またこの臨時総集会で私たちが分かち合った信仰、会のカリスマの創立の雰囲気を保っている場所（ポルツイウンクラ、ラ・ベルナ、グレッチオ、フォンテコロンボ）への巡礼、同じ霊性を共有する兄弟姉妹たちとの交流、そしてクララ会の姉妹たちとの喜びに満ちた出会いを、私たちはいつまでも記憶の中に生き生きと残しておくべきです。これらの体験は言葉では言い尽くせないものなのです。

3. 「主は道々わたしたちに話してくださる」は単なるタイトルではありません。この総集会の間に用いられたエンマウスへ向か

¹ 「生命の書、救いへの希望、福音の真髄、完徳への道、天国の鍵、永遠の契約」2 チェラノ 208

² 「現代のフランシスコ会の使命」マドリッド 1973、「総集会総括文書」ローマ 2003、「創立の恵み」ローマ 2004、「臨時総集会準備文書」ローマ 2006。

う弟子達の物語から採られました。わたしたちは信仰の分かち合いの中で、心の不安も自由に表しました。わたしたちの生活の方向についても自問しました。他の人々の中に実現している救いの神秘に私たちの心は開かれました。わたしたちは御復活の主からいただく内的な力に驚かされると共に、それによって刷新された希望をもってそれぞれの修道院に戻っていきました。「主は道々わたしたちに話してくださる」は記念であり、体験であり、道であり、派遣であり、誰にでも開かれている招きです。エンマウスは古くて常に新しい道です。その道を各兄弟と共にもう一度旅したいものです。

意味を乞い求める者

4. わたしたち兄弟はポルツィウンクラの入り口に全世界から共に集まりました。そこでわたしたちは、人々の各共同体のすばらしさと美しさ、そして輝きにまず心打たれました。地理的距離と違いがもたらす豊かさがあります。わたしたちはもはや互いに孤立して生きてはならず、多文化・多宗教が複雑に織り合わされた中で生きているのです。その特徴はグローバル化された社会の中で直接的な相互交流であることをわたしたちは強調しました。わたしたちが兄弟たちの多言語によるレポートと列席している兄弟たちを通して認識したこと、また、予期しない無限の繋がりを通して認識したこと、それは変貌する時代に起こる多様性の贈り物であり、神についての良い知らせ、つまり無限の豊かさであるということです。

5. しかしながら、世界がますます近くなったこの喜びも、そこにある痛みを覆い隠すことは出来ません。それは単なるイメージではありません。わたしたちは抽象的な人間性について話しているのではなく、日常生活につながっている現実の顔と名前のある人々について話しているのです。彼らはわたしたちを決して見捨

てることのない愛すべき兄弟姉妹たちであって、模索しているわたしたちを導く力を持つ人々なのです。わたしたちはこの人々と分かち合っている現実の苦悩に目を向けています。その苦悩は信仰と思想の多様性を制限する急進的原理主義に由来するものです。わたしたちはまた、基本的人権としての食物、住居、教育、仕事などを求めて叫ぶ人々や生活改善の何の確証もなく移住しなければならない人々の痛みにも目を向けます。わたしたちは生活にのしかかり、信仰のみならず基本的な人間相互の信頼まで奪い取る文化的・社会的・政治的圧力について分かち合いました。そこには疑いもなく、権力と影響力を勝ち取ろうとする戦い、思想や技術や経済交流と武力によって人々を操ろうとする欲望が渦巻いています。わたしたちは、倫理的規範なしに、あたかも絶対的な神であるかのように自分の力だけでこの世界をコントロールしようとするグローバル社会の重圧を強く感じています。これに劣らず憂慮すべきことは、情け容赦なく進む人類共通の住まいである自然の破壊です。

6. この時代の苦しみと無意味さ、危機と混沌に直接触れてみて分かるのは、現代人の多くが歴史と人間存在と命の意味について自問していること、また真の希望とは何かなど、すべてを新たに問い直しているということです。わたしたち小さき兄弟はこの模索と縁遠い者ではなく³、むしろ自分たちを、意味を乞い求める者 (mendicants of meaning) として現代の他の人々の模索と結びついていることを自認しています。

希望の訪れ

7. イスラエルの民は大変な危機の時代にあって、自分たちを創造し解放してくださった神の素晴らしいみ業を思い起こし、そこから力を得て前進することができたのです。わたしたち小さき兄

³ Cf. José Rodríguez Calballo, 総長報告書, 121.

弟たちも同様に、「神の示しを受けて⁴」、わたしたちの思い出と創立の懐かしい祭壇であるアシジに戻ってきました。わたしたちは人間として、教会として、修道会としての将来について、多くの懸案と長年の疲れ、そして不安を抱えながらここにやって来ました。

8. フランシスコの会もっとも小さな家であり発祥の地であるポルトゥイウンクラに戻って来たわたしたちは、自らのアイデンティティ、つまり光と影も含めてすべてが、フランシスコの兄弟的な抱擁のうちに心地よく抱かれている事を体験しました。フランシスコがわたしたちに残してくれたのは、彼の体験と開かれた未完の書物としての創立時のテキストです。それは、「常に聖なる教会の足下⁵」に留まり、神と世界に忠実に奉仕するわたしたちによって完成されるものなのです。わたしたちはフランシスコと総長に心を合わせ、いと高く栄光に満ちた神が、わたしたちの心と世界を覆う闇を照らして下さるように懇願しています。きっと神はわたしたちに正しい信仰と確かな希望、そして完全な愛を与えてくださるでしょう⁶。フランシスコが私たちに求めていることは、蔑まれた人々の只中で、貧しく弱い人々と共に、病人やハンセン病患者と共に、道端にあって物乞いする人と共にあるときにわたしたちが喜ぶことです⁷。フランシスコが忠実な旅の同伴者である兄弟レオに与えたのと同じ心遣いと祝福を、わたしたちにも下さっていることを体験しました。フランシスコが望んでいたように、主はその御顔をわたしたちに示し続けてくださいました⁸。エンマウスへ旅する弟子についての聖書箇所は⁹、わたしたちの旅路の範例

⁴ 未裁可会則 2,1. クララの会則 2,1

⁵ 会則 12, 4.

⁶ Cf. 十字架上の主のみ前で捧げられた祈り 1.

⁷ Cf. 未裁可会則 9; シエナでの遺言 1-2; 1 チェラノ 17.

⁸ Cf. 兄弟レオに与えられた祝福 1.

⁹ Cf. ルカ. 24,13-36

(パラダイム)としての案内役になり、わたしたちはそれに沿ってこの世界の違った道を歩み始めたいと願っています。

9. わたしたち自身の生活体験を分かち合うことで、修道会の創立の原点に立ち返っているわたしたちには希望の訪れがあります。それは、この世の希望ではなく、貧しく十字架にかけられキリストがもたらす希望であり¹⁰、キリストはこの世界で貧しく十字架にかけられた人々の代弁者なのです¹¹。わたしたちがそれを知るのには福音のイエス・キリストの体験とわたしたちの実生活体験を合わせて深く読み取るときです。わたしたちは迷いから少しずつ解放されていきます。また、安易な理想主義や皮相的な実用主義はなくなり、わたしたちは神の国の希望に満ちた緊張の中に生きているのを知ります。それは、弟子にとって有益な状況なのです。フランシスコに示しを与え、現代のわたしたちにも示しを与えて下さる神は、人類の苦しみに無関心であったり、距離を置いたりするお方ではなく、かえって「人類の創造主・贖い主・慰め主・救い主」¹²としてご自分を示しておられます。神は「すべての善・至高の善・善そのもの」¹³、宇宙の支え、喜びであったし、今もそうであり、これからもそうです。この希望によって、わたしたちは自分の置かれている場に正義と平和と善をもたらすように献身します。そして、自分を取るに足りない単純なしるし、夜空で静に瞬く一つの星であることを自覚することによって、わたしたちはすべての人に命の本源¹⁴を示す者とされます。

¹⁰ Cf. 2 チェラノ. 105.

¹¹ Cf. マタイ. 25:31-46.

¹² 主禱文についての釈義 1.

¹³ 未裁可会則 17:5-7, 17-18; Cf. PrsG 3.

¹⁴ Cf. マタイ. 2:1-3.

賜物の光のうちに

「主はわたしに与えてくださいました・・・」(遺言 1, 4, 6, 14, 39)

なによりもまず生活から

10. わたしたちが共に住む中で確認したことは、フランシスカンにとって最もふさわしい方法とは生活から始めるということです。つまり、わたしたちの召命をよりよく理解するために、わたしたちは実践の重要さから始めます。論理は生活を照らして解明してくれますが、決して生活の代わりにはなりません。

11. フランシスコは福音を聴いてしまってから、猶予せずに衣服の形を変えました¹⁵。それは部分的で即物的なやり方かもしれませんが、聞いたみことばを実践することは必要なことなのです。単に知的なレベルではなく、真に霊的な理解に到達するには経験のプロセスを経ることが必要です。つまり、歴史的現実近づき、みことばを注意深く聴いてそれを直ちに生活に適應させるというプロセスが必要なのです¹⁶。サン・ダミアーンで十字架のキリストが教会を修復するようにフランシスコに呼びかけた出来事がその典型的なものでした¹⁷。彼はすぐに壊れかかった聖堂の再建に取りかかりました¹⁸。彼がそうしたのは、よく言われているようにキリストのメッセージを誤解したからではありません。そうではなく、自分に向けられたことばの深い意味をきちんと悟るためでした。そのために経験という場に自分を置き、人々と共に行動することが必要だったのです。フランシスカンの識別の知恵は「訓戒のことば」に凝縮されています。「今知っており、また、知りた

¹⁵ Cf. 1 チェラノ 22.

¹⁶ Cf. ルカ. 6:46-49.

¹⁷ Cf. 大伝記 II:1.

¹⁸ Cf. 大伝記 II:7-8.

いと望んでいるすべての知識を、自分のものとせず、ことばと行いをもって、すべての善の所有者であられるいと高き主におかえしする人は、聖書の霊で生かされている人なのです¹⁹。いつも最初にあるのは生活体験であり、各人各様の苦難と喜びの現実、そして人々や被造物との人間的な出会いなのです。それから、信仰の光のうちに行う生活の解釈が続きます。それは、生涯続くサイクルです。わたしたちはこの方向に向けて共に歩いて行けるでしょうか。実践優先の原則は、わたしたちがこの臨時総集会の間に何度も繰り返した勧告ですが、各文化の特色とそのニーズに沿いながら、今なされている対話の実践を強め、新しい行動を作り上げていきます。

会則と生活

12. 近年、明らかになってきたことがあります。それは、わたしたちフランスカンの霊的・知的伝統は、初期の共同体が都市や大学でしていた経験と同じように、行動への道（path）を確認しているということです。フランススコは、「主の霊とその聖なるみ業を捜し求める」²⁰ように教えています。会則そのものはフランススコとの関連でだけではなく、兄弟たちと社会、そして教会の生きた経験に照らして、実践においても理論においても絶えず解釈されてきました。わたしたち兄弟には、会則があるだけではなく、会則と生活があるのです²¹。ハレスのアレクサンダー、ポナベントゥーラ、ペトロ・ヨハネ・オリビー、ヨハネ・ドゥンス・スコトゥス、ウィリアム・オッカムといった本会の神学者たちが広範囲にわたって論じていることは、神のみことばの学問的研究とは、わたしたちの生活を変容させて頂に至らせるものであり、知的土台を固めるためのものではないこと、むしろ、神との愛の

¹⁹ 訓戒 7; クララの遺言 6.

²⁰ Cf. 会則 10:8.

²¹ Cf. 会則 1:1.

交わり、わたしたち自身と隣人たち、とくに世界において最も排斥されている人々との愛の交わりのためのものであるということです²²。フランシスカンの伝統において神学は、学問ではなく智慧です²³。それは世界を変容させるための道具として、わたしたちの出会いを深く味わうことを求める智慧です。わたしたちはこの伝統を知っているでしょうか。わたしたちの学校や研究機関はこの伝統を支援しているでしょうか。この50年の間に深められてきたフランシスカン源泉資料の批判的研究のことを、わたしたちは知っているでしょうか。

13. この臨時総集会の際にわたしたちが問題にしてきたことは、わたしたちフランシスカンの偉大な哲学的、神学的、神秘的、芸術的伝統を批判的精神をもって掘り起こしていく必要があることについてでした²⁴。それは現代文化の真只中でことばと行いをもって福音を宣べ伝えるわたしたちの使命を支えるためなのです。わたしたちの源泉資料である聖フランシスコの書き物とわたしたちの伝統についての知識なくしては、ファンダメンタリズムと現今の感情的な風潮に足をさらわれて、わたしたちとは縁もゆかりもない思想や行動に飲み込まれ、わたしたち独自の貢献が出来なくなってしまう危険があります。このことを念頭において、わたしたちの遺産をふさわしく適応するために、現代というコンテキストと人々の生死に関わる叫び、そして今日的チャレンジから目を背けてはなりません。

信仰の賜物

²² Cf. 会憲 128.

²³ Cf. Bonaventure: Proemii Quaestio 3 of the Commentary on Book 1 of the Sentences; John Duns Scotus: Ordinatio Prologus, Pars V, De theologia quatenus scientia practica, 151-237)

²⁴ Cf. 会憲 166:2.

14. しかしながら、生活を解釈するために現実に近づくだけでは十分ではありません。信仰の目で現実を見る必要があります。言い換えれば、具体的な教会との交わりの中で神とそのみことばとの深い関係を土台にして生活することが必要なのです²⁵。フランシスコの最初の仲間であるベルナルドに倣って、わたしたちもフランシスコに尋ねました。「わたしたちは何をすれば良いのでしょうか」と。フランシスコは答えました。「翌朝、教会に行き、福音書を手にとってキリストの勤めを聴きましょう²⁶」。「福音に立ち返りましょう。そうすれば、わたしたちの生活は詩の心と創立時の美しさと魅力を取り戻すでしょう…。福音を解放しましょう、そうすれば福音はわたしたちを解放してくれるでしょう²⁷」。福音に近づくための聖書解釈学の鍵には、まさに奴隷の身分からわたしたちを解放する潜在的な力があります。

15. わたしたちが自らに問いかけていることは、福音へのこの必要なアプローチが邪魔になっていないかということです。つまり、自分自身について、また、いつも共の働くように招かれている他の人々との関係で、より基本的で水平的な信仰・信頼というものが欠けているために、福音への必要なアプローチが邪魔になっていないだろうか、ということです。信仰のダイナミクスは、人生の始めからわたしたちの特徴としてあります。誕生の時、わたしたちは母親や育ててくれる人によって受け入れられました。わたしたちはこの人たちに自分を委ねます。同様に、わたしたちと触れ合い、わたしたちを受け入れ、わたしたちを激励し、わたしたちを矯正し、わたしたちを愛する人たちも、わたしたちを信頼しています。わたしたちが日々の生活の中で有する世界や神、そして兄弟たちとの基本的な関係は、まず何よりもこの生来有している根本的な信仰の土台の上に築かれます。わたしたちが信仰につ

²⁵ Cf. 会則 12:4.

²⁶ Cf. 2 チェラノ 15.

²⁷ J. Rodriguez Calballo. 総長報告書, ローマ, 2006, no. 5

いて話すとき、二重の関係について話しているのです。それは横のつながりとしての人と人の関係、そして縦のつながりとしての人と神との間の関係です。この二の関係は密接に結びつけられています。

16. この臨時総集会の間に、わたしたちは人間相互の信頼を損なう状況や葛藤があるのに気づきました。小さき兄弟としてわたしたちは、この基礎的で根本的な信仰を回復させるよう招かれていますと感じています。それなしには、生命の神に信仰において近づくことは難しく、また、他者を兄弟姉妹として受け入れることも難しくなるでしょう。相互信頼が織りなす生地を補強する手段として、わたしたちは初期養成と生涯養成の緊急性を感じています。それは、人間としての基本的な準備と個々人に見合った信仰に配慮する養成です²⁸。以上のことから分かるのは、信仰について語るとき、わたしたちは賜物の前にいるということです。ですから、わたしたちの内にある聖霊の働きは、人間的な決定主義を超えていきます。「信仰は議論によってではなく、聖霊の働きによって人々の心に生まれるのであり、聖霊はお望みになるままに、人それぞれに賜物を与えてくださいます²⁹」。

17. サマリアの女の話³⁰は神と他者との関わりにおける信仰を描いています。彼女はみことばとの出会いにおいて成長し、信仰を深めていきます。こうして彼女は他者のための使徒へと変えられました。彼女の回心のプロセスは、イエスが見ず知らずの女である彼女の状況と葛藤を受け入れ、彼女が心のままに自分のすべての真実をイエスにぶつけていくことをイエスがおゆるしになったところから始まったのです。神はわたしたち人間に対して同じようになさいます。そして、わたしたちを泉へとより深く導き、二

²⁸ Cf. 同. 115.

²⁹ Cf. 会憲 99.

³⁰ Cf. ヨハネ. 4:1-42.

度と渴くことのないようにしてくださいます。この満たされた渴きこそ、現代人へのメッセージなのです。

18. 信仰とは、神がわたしたちにお触れになり、わたしたちを癒し³¹、わたしたちの重荷を解き、わたしたちを和解させ、わたしたちが希望するものの存在を保証し³²、わたしたちに送ってくださるものです。信仰はわたしたちの歴史、わたしたちの体と心と感情、つまり、わたしたちのすべてを丸ごと包みこみます。そして、わたしたちが全人格をもってみことばに聴き従うように導き、みことばは豊かな未来をもたらします³³。信仰生活はわたしたちの喜びと希望³⁴の唯一の源であり、イエス・キリストの弟子として世界への証となるものです。

賜物の論理

19. 信仰を土台とした現実を見つめる新しい方法を提案したいと思います。宇宙は神の無償の賜物によって創造されました³⁵。わたしたち兄弟が召されたのは、賜物の論理を世に伝えるためです。それは今の時代がわたしたちに押しつけている法律の論理、価格と市場の論理、自己利益の論理を超える論理です。このビジョンはすでにフランシスコに与えられていました。「私たちは皆、『心を尽くし、魂を尽くし、精神を尽くし、力』と能力を尽くし、知恵を尽くし、全力を尽くし、努力を傾け、情を尽くし、大いなる感動をこめ、憧れと望みとをことごとく挙げて、神である主を愛そう。主は私たちに体と魂と命のすべてをかつて与え、今も与えておられる。主は私たちを創造し、贖ってくださった。そして、

³¹ Cf. ルカ. 5:17-26; 1ペトロ 1.5-9

³² Cf. ヘブライ. 11:1

³³ Cf. Bonaventure. Sent. III.

³⁴ Cf. 2003年総集会総括文書, 22-27.

³⁵ Cf. 会憲 20:2

ただ御自分の憐れみによって私たちの救いを全うしてくださる³⁶。わたしたちに与えられているあらゆるよいものは、わたしたちの所有ではなく、皆と分かち合い、皆に返されるものです。

20. 三位一体の論理は神がご自身を完全にすべて与えつくすという賜物の論理です。御父である神は聖霊において永遠に御子にご自身を与え、聖霊は御父と御子によって永遠に与えられています。三位一体の一致は愛の一致です。神は愛であり、愛そのものです。なぜなら神の生命そのものがご自身の永遠の贈り物だからです³⁷。イエスにより頼むことによって、賜物のダイナミックな表れを歴史の中に見ることができます。御父の愛からのほとばしりであるキリストご自身が最高の賜物です。キリストはご自身を与えつくし³⁸、生命を与え³⁹、十字架の秘儀の内に自らのからだを与えました⁴⁰。イエスはいつまでもご自身を、みことばを⁴¹、生命のパンを⁴²、ご自分の平和を⁴³、霊を⁴⁴、永遠の生命⁴⁵を与え続けておられます。

21. イエスは特別な方法で母マリアを、ご自分の最も完全な弟子としてわたしたちに与えてくださいました⁴⁶。賜物の論理に従って、マリアは「めでたし、貴婦人、聖なる女王、聖なる神の母マリア。あなたは、天のいと聖なる父によって教会として造られ、

³⁶ 未裁可会則 23:8

³⁷ Cf. ベネディクト 1 6 世, 神は愛, ローマ 2005.

³⁸ Cf. ガラテア 1:4; Cf. 1 ティモテ 2:6.

³⁹ Cf. マルコ. 10:45.

⁴⁰ Cf. マタイ. 26:26.

⁴¹ Cf. ヨハネ. 17:7,14.

⁴² Cf. ヨハネ. 6:35,51.

⁴³ Cf. ヨハネ. 14:27.

⁴⁴ Cf. ヨハネ. 3:34.

⁴⁵ Cf. ヨハネ. 10:28.

⁴⁶ Cf. ヨハネ. 19:26-27

そして選ばれた処女。御父はいと聖なる愛子と慰め主なる聖霊とをもってあなたを聖別された」方です⁴⁷。

22. 創造者の似姿であるわたしたちは、神の賜物の受容者です。生命の所有者ではありませんが、いと高き神から賜物として生命を絶えず受けています。わたしたちは神の絶えざる自己贈与に倣って人々に自分を与える能力、しかも無償で与える能力を持っています。それは聖体祭儀の中で経験していることです⁴⁸。わたしたちは神からその独り子という賜物を受け、御子との親しい関わりに入り、その愛を広げるために聖霊によって世界へと派遣されているのです。現代世界憲章にあるように、「人は誰も自分自身を無私無欲の気持ちで与えなければ、完全に自分自身を見いだせない」⁴⁹からです。わたしたちを他者との出会いへと向かわせるのは三位一体の神です。神の賜物は無からすべてを創造されましたが、わたしたちの場合、神から受けた善いものをお返しすることが出来るだけなのです⁵⁰。

23. 三位一体の神への信仰の光に照らして、わたしたちは一人ひとりの兄弟が多様性と個性を持った者として与えられた賜物であることを知っています。ですから、わたしたちは兄弟との無償で公平無私な愛の関係に入れるのでしょうか⁵¹。したがって、主への忠実のもっとも明らかなしとは、互いに明言する愛です⁵²。シエナでの遺言の中で、フランシスコは当時の兄弟たちとこれから「世の終わりまでに」入って来る全ての兄弟たちに「わたしの祝福と遺言を覚えているしとして、互いに、いつも愛し合う

⁴⁷ 幸いな処女マリアへの挨拶 1.

⁴⁸ Cf. 訓戒 1 チェラノCf. 全兄弟会への手紙 28-29.

⁴⁹ 現代世界憲章 24. .

⁵⁰ Cf. 会憲 20:1

⁵¹ Cf. 遺言. 14.

⁵² Cf. ヨハネ. 13:35, 11:36.

ように」⁵³と書いています。

24. 主イエス・キリストの足跡（その生涯と受難と死と復活）に従うことによってのみ、わたしたちは個人的、共同体的、社会的な現状（それにはいつもわたしたちの限界と罪の跡がついていますが）に直面するための力と明晰さを見だし、神からの賜物という観点から見つめることが出来るのです。

25. 受難の聖務日課の中で、フランシスコはわたしたちを豊かにするために自ら貧しくなられたキリストの思いを自分のものにしていきます⁵⁴。キリストにしっかり結びついている事によってのみ、わたしたちはクララがプラハのアグネスに書き送ったように、お互いに言うことが出来るでしょう。「わたしには、あなたがこの世の畑と人の心に隠されている類ない宝を、すべてを無から造られたお方から買い受けて、どのように謙遜に、信仰の力を持って、清貧の腕で抱えていらっしゃるかが分かります。それで、わたしはあなたを神ご自身の協力者、そして言葉では言い尽くせない主のおん体の弱い部分の支えであると考えています⁵⁵」。

⁵³ シエナでの遺言. 3.

⁵⁴ Cf. 御受難の聖務日課; 2 全キリスト者への手紙 5-13; 2 コリ 8:9.

⁵⁵ 3 プラハのアグネスへの手紙 7-8.

賜物の光のうちにある
「派遣されて宣教する使命を帯びた兄弟共同体」
(Fraternity-in-Mission)

どの家に入ってもまず「この家に平和があるように」
と言いなさい。(会則 3:13)

賜物である兄弟たち

26. わたしたちが互いに兄弟として受け入れ合うことは、すべての父である神への信仰から生まれるものです。この信仰の上に立って、わたしたちは他者を受け入れ、フランシスコのように「主はわたしに兄弟を与えて下さった」と言うことができます⁵⁶。兄弟的關係というものは、わたしたちの善意や徳によってだけでは生まれません。神からの賜物として生まれるものなのです⁵⁷。イエスが断言されたことは、わたしたちにとっても真実です。「わたしの母、兄弟とは、神のことばを聴いて、行方人のことである⁵⁸」。同じように、わたしたち兄弟共同体は、兄弟となるようにわたしたちをお呼びになった唯一の父である神を知ることによって生まれるのです。各兄弟共同体は、全被造物がキリストの光の下に創られたひとつの家族であるという良い知らせを、それぞれの構成メンバーである兄弟たちの和合 (harmony) によって証するのです。

27. わたしたちに示されたこの真実には、避けて通れない実践的な課題 (task) が伴っています。例えば、召命の識別や信仰教

⁵⁶ 遺言. 14.

⁵⁷ Cf. 会憲 40.

⁵⁸ Cf. ルカ. 8:21; マタイ. 12:15; 1 全キリスト者への手紙 7.

育のレベルで、さらに、兄弟相互の関係の持ち方、修道会や教会での、そして世界における奉仕の仕方などに伴うものです。わたしたちは、互いが兄弟となるように召されていることを受け入れる信仰を持っているでしょうか。わたしたちは、互いに兄弟であることを本当に喜んでいるでしょうか。わたしたちは、兄弟共同体を築くことを基本的な課題（task）として生活しているでしょうか。これらの洞察にきちんと取り組むこと自体が、未来へ向かう道（path）を開くことなのです。

すべての被造物の小さき兄弟

28. わたしたちは兄弟です、と言うだけでは足りません。わたしたちは小さき兄弟⁵⁹なのです。小ささこそが、わたしたちの兄弟的關係と奉仕職、特に司祭職の実践を規定する具体的な姿（form）です⁶⁰。ある兄弟は司祭として、他の兄弟はブラザー（修道士）として奉仕します。しかし、わたしたちは皆、小さき兄弟なのです。フランシスコは「聖職者の兄弟にも、聖職者でない兄弟にも、説教、祈り、労働のいずれかに従事する、わがすべての兄弟に、万事においてへりくだるよう」に願っています⁶¹。フランシスコが福音⁶²から取った「小ささ」ということばは、他者とのかわりにおいて自分のほうが小さい者であることを意味しています。小ささとは個人的になされた賭です。それによって、他者に自分を表すのに何の妨げもなくしてしまいます。これこそ他者の神秘の前で、度々履物を脱ぐわたしたちのやり方です。神秘であられるお方は、ご自分を他者の中にお顕しになるからです⁶³。

⁵⁹ 会則 1:1.

⁶⁰ Cf. 会憲 164.

⁶¹ 未裁可会則 17:5.

⁶² Cf. マタイ. 20:25-27, ルカ 22:26;未裁可会則 5:9-12 での引用

⁶³ Cf. 出エ 3:5.

29. 小ささの典型は、「神であることに固執せず、皆のしもべと
なられた⁶⁴」キリスト以外にありません。全被造物に対して小さ
き者であるというわたしたちの在り方は、昔から変わることのな
い態度を取らせます。つまり、「兄弟たちは、どこにいても、また、
どんな所で出会っても、心をこめて愛情深く挨拶し合い、『互いに
つぶやくことなく』尊敬し合わねばならない⁶⁵」のです。フラン
シスコはさらに「つつましかで、『すべての人に心から優しく接
しなければならぬ』。裁いても、罪に定めてもいけない。主がお
命じになっているように、他人のきわめて小さな罪も考えず、む
しろ、『心に苦痛を抱きながら』自分の罪を省みなければならぬ」と
強く勧めています⁶⁶。わたしたちには小ささを土台として、他
者の尊厳を守るしっかりとした豊かな伝統があります。それは、
ひいては個々人とすべての人の救いの道(path)となるものです。

30. この兄弟的な関わりは、わたしたち兄弟間だけのことでなく、
広くすべての人々との関わりについて言える特徴です。わた
したちがあらゆる人々、男性にたいしても、女性に対しても小さ
き兄弟であると感じ、また小さき兄弟であります。それはフラン
シスコが兄弟たちを派遣する時のことばに良く表れています。
「(兄弟たちは)口論や争いをせず、神のためにすべての人に従い
なさい⁶⁷」。すべての人に対するこの小さき者としての関係は、
わたしたちのミッションに密接に結びついています。すなわち、
信徒の中で、女性たちとの関わりにおいて、教会内での生き方
において、諸宗教間の対話の必要性において、全被造物との関わり
において、さらに、この世のすべての小さな人々の間での小さ
き者としてのわたしたちのミッションに結びついています⁶⁸。わた

⁶⁴ フィリピ 2:6-11.

⁶⁵ 未裁可会則 7:15.

⁶⁶ 未裁可会則 11:9-12.

⁶⁷ 未裁可会則 16:6.

⁶⁸ Cf. 会憲 97.

したちには、小ささの良い知らせを生きるための明晰さと大胆さがあるでしょうか。

兄弟的生活への配慮

31. わたしたちは体験の分かち合いを通して、兄弟共同体には注意深い配慮が必要だと確信しました。それはまさに、わたしたちの生活の優先事項の問題です。断片化され分裂の傷に病んでいる世界に住んでいれ者にとってはなおさらのことです。この分裂はわたしたちの兄弟的生活にも無縁ではありません。ですから、兄弟共同体への配慮は、しばしば相互のゆるしと交わりの道の形を取る必要があります⁶⁹。様々な会議で繰り返し言及されることですが、兄弟たちの心理的成熟にもっと注意を払うことが必要です。なぜなら兄弟的関わりでの多くの問題は、人間的脆さから出てくるからです⁷⁰。

32. 兄弟たちを力づけ、励ます務めのある院長と管区長たちを特に支援しなければなりません。修道院会議は信仰と兄弟性を分かち合うひとつの良い手段としてすでに行われています⁷¹。あらゆる次元で生活を分かち合う時間と種々の方法がますます必要になっています⁷²。兄弟共同体での生活には、同伴と母親的配慮が初期養成のときだけではなく、生涯に渡って必要なのです。

ミッションとしての生活

33. 今日のわたしたちの基本的選択とは、小さい人々の間で小さき者として福音を生きることです。しかし、変化の激しい時代に

⁶⁹ Cf. 未裁可会則 5:7-8, 20; 会則 10; cf. 会憲 33:1.

⁷⁰ Cf. 会憲 127:2.

⁷¹ Cf. 会憲 241.

⁷² Cf. 会憲 42.

生きているわたしたちは、新しいパラダイムやカテゴリーに注意を払わなければなりません。わたしたちのミッションについての真剣な見直と、効果的な在り方と証についての未知の道をあえて取ることが必要です。わたしたちは自分のミッションのどこに焦点を合わすべきかを再検討し、わたしたちの社会的・教会的状況のあるものを取捨選択する決定をしなければならないからです。それによって、わたしたちは修道生活の境界状態 (liminality) をより確かに受け入れ、辺境に生きる者となれるでしょう。それはフランシスカン・アイデンティティの本質なのです。社会においてであれ、教会においてであれ、わたしたちは小さき者と呼ばれているのです。

34. 総長の報告書が強調しているのは、福音宣教のフランシスカンのプロジェクトを作成するためのアイデアです。個人的プロジェクトだけではなく、兄弟共同体としてのプロジェクトのアイデアです。共同体での信仰生活 (小さき者としての、兄弟的な、祈りにあふれた生活) は、世界に対するわたしたちの第一の証だからです⁷³。さらに、新しい海外宣教プロジェクトを力づけ、支援するプロセスへの兄弟たちの特別な熱意をフランシスコ会は必要としています。これは本会の将来を保障することにつながるのです⁷⁴。

35. わたしたちのミッションにおいて発展させなければならない新しい方向性については、次の三つの文書に提示されています。「全世界をキリストの福音であまねく満たすために(1996)」と「2003年総集会総括文書 主があなたに平和を与えてくださいますように」、そしてJPC担当室が作成した「新しい世界は可能である(2005)」です。三つ目の文書は、エコロジカルな回心と環境正義について、非暴力による行動、難民、土地のない人々、お

⁷³ Cf. J. Rodriguez Calballo. 総長報告書,2006 n. 79

⁷⁴ Cf. 同. n. 76.

よび移住者の世話、少数民族とのかかわりについて、さらに会計における倫理問題についても、いつもフランスカンの観点から取り上げています。今日、新しい様々な課題がこれまで以上にわたしたちに提示されています。それは、わたしたち兄弟共同体内部における生活と実践についての継続的な識別と誠実な評価の必要性、さらに、信徒や女性との誠実な対話の必要性から来るものです⁷⁵。

対話と文化内開花 (inculturation)

36. 今日のミッションは対話という在り方をしています⁷⁶。対話の精神とその実践は、まずわたしたちの共同体から始まります。わたしたちのうちに真実と信仰に裏打ちされた対話、ご自身をお示しになる神との親しい対話がなければ、どうして世界に向かって対話しようと言うことが出来ましょうか。この臨時総集会の中で、わたしたちは対話を具体化する四つの方法について話し合いました。それは、紛争状態や緊張関係の只中における存在としての対話、新しい交易市場における行動としての対話、知的・文化的活動としての対話、諸宗教者間の体験の分かち合いとしての対話の方法についてです。フランスカンはいつも境界線を踏み越える者でした。それは同じ御父の子供としての自覚から来る兄弟としての繋がりを求める熱意によるものです。わたしたちはアシジの精神⁷⁷と2003年の総集会文書「主があなたに平和を与え

⁷⁵ Cf. 会憲 1:2.

⁷⁶ Cf. 会憲 93; H. Schalück, 「全世界をキリストの福音であまねく満たすために」1996, III-2.

⁷⁷ Cf. John Paul II, Message to the Minister General of the Friars Minor, 1st August 1999; ベネディクト 16 世, Message for the XX Anniversary of the Prayer Meeting for peace, 2nd September 2006; José Rodríguez Carballo, Letter to the Order for the XX Anniversary of the “Spirit of Assisi”, 8th September 2006.

てくださいますように⁷⁸」に戻るのには相応しいことだと考えています。その中には未来への道を開く実践的方法が提示されています。すなわち平和への道としての対話、平和の姉妹である巡業の旅（itinerancy）兄弟共同体が共に得る聖性、についてです。

37. フランシスコはわたしたちに関係の一つのしるし、それも極めて今日的なしるしを残しています。それは彼のスルタンとの対話です。当時も現代の情勢と同じように非常な緊張関係の中で対話が行われました。フランシスコは神への信仰に基づいてこれを実行しました。しかし同時に、スルタンに対して驚くほどの信頼と喜んで何かを学ぼうとする姿勢をも示しています⁷⁹。対話が困難に見える現実を踏まえながらも、わたしたちはフランシスコのように努力しなければなりません。そして、時代のイデオロギーによって設定された境界線内に閉じこもってはならないのです。すべての自由がほとんど奪われ、困難がその極限に達したかに見える世界にあっても、わたしたちの単純な存在と堅忍こそがすべての人にとって最高のしるしとなります。境界線を踏み越える力を主に願いましょう。その単純さと自由をもって、わたしたちの生活が信仰と交わりの惜しみない捧げもの、希望の目印となれませうように。

38. 一方、本会のミッションはカリスマ的であり、種々多様なものです。それは兄弟たちがそれぞれ、いと高きお方からいただいた賜物から来るものであり、また、各兄弟の置かれている状況によって特に必要とされることから来るものでもあります。フランシスコにとって、また現代のわたしたちにとって完全な兄弟共同体とは、各兄弟の賜物が共に集められ、それをもって神の御国に奉仕する共同体です⁸⁰。この多様性を生きるには、文化内開花

⁷⁸ Cf. 2003年総集会総括文書 28-36, 42-45.

⁷⁹ Cf. 1 チェラノ 57; 大伝記 9:7-9.

⁸⁰ Cf. 完全の鑑 85.

と文化相互性⁸¹の原理を理解し、受け入れ、実践することが必要です。また、他方では、わたしたちのミッションは、同じものでなければなりません。つまり、自ら貧しくなり、貧しく見捨てられた人々を選び取っていったキリストのしるしを帯びるという点で同じ (uniform) なのです⁸²。一致のこの認識は、わたしたちが従順、何も自分のものとせず、貞潔のうちに、キリストの福音を生きるよう促します⁸³。多様性がありながら同じであるという二重性を認識することによって、わたしたちは弟子であることに付随する福音的緊張の中にあっても常に健全さを保つことが出来ます。聖霊の働きを通して、イエス・キリストにおける神体験を中心とした在り方にもう一度戻りましょう。それは、わたしたちの生活とミッションが本物となるための道 (path) なのです。

⁸¹ Cf. 会憲 94.

⁸² Cf. 会憲 84.

⁸³ Cf. 会則 1:1.

エンマウスの方法論

39. なによりもまず生活です。しかもキリストに従う者として過ごして発見した生活です。それは、わたしたち自身で実行した分かち合いの中で、そして、共に働く一人ひとりとの分かち合いの中で発見した生活です。これこそわたしたちを未来へ向けて導く道 (path) であり、方法 (method) です。

40. わたしたちはまた、会の創立時に兄弟たちが共に歩き始めたときに、フランススコと兄弟たちが祈りと出会いの方法論を実践して復活されたキリストの現存を発見した事を知っています。兄弟たちは巡業の旅をする者 (itinerat) でしたから、一致するために伝統的修道院 (monastery) の壁や時間割に頼っていませんでした。彼らは「従順の生活⁸⁴」に入り、すべての人に仕える者であったのです⁸⁵。兄弟たちは「道々何が起こったのか」を分かち合う共通の場を持っていました。この信仰の「聖なる交わり」と福音についての省察は、わたしたちがどのように共に生きていくかの方法論となり、最初の兄弟たちのアイデンティティを形作りました。

41. チェラノは原始会則がインノセント 3 世から認可されたあとも、兄弟たちの中で多くの疑問 (question) が出てきたことを記しています。「兄弟たちが旅の道すがらお互いに話し合っていたのは、慈悲深い神から受けた数々の偉大な恵みと、彼らを暖かく迎え入れたキリストの代理であり、キリスト教界全体の優しい牧者の心遣いについて、また、受けた助言と命令を実行するには、どうしたら一番よいか、誠実に忠実に会則を実践し、守りぬき、いと高き方の前で修道者として、聖く道を歩むにはどうすればい

⁸⁴ Cf. 会則 2:11.

⁸⁵ Cf. SalVt 16; 遺言 19.

いのか、そして最後に、自分たちが、聖徳を高めていく中での生き方と振る舞いが、どのようにしたら他の人々の模範になるだろうか、ということでした⁸⁶」。

42. このダイナミックな相互の問いかけ（questioning）と識別とが、組織としての発展と個人としての、また兄弟共同体としての回心のプロセスにとって重要であることを確認するものが、会則と生活です⁸⁷。

43. 会則（propositum vitae）と遺言との相互作用、そして教会による解釈の800年の歴史が明らかにしているのは、創立の恵みはわたしたちにある方法論を取るように求めているということです。わたしたちの只中で、道、真理、命⁸⁸として現存される主を見出すのは、わたしたちが信仰を土台として回りにいる人々に耳を傾ける時であり、また、わたしたちの中に在る（dwell）ものについてはっきり話すときです。

44. 歴史の中の今、わたしたちの世界が徹底的に変化する中で創立の恵みを思い起こす時、わたしたちの前にあるチャレンジとは、本質的なところに行くことです。つまり、人間的にもキリスト者としても、もっと深いレベルで分かち合うことです。わたしたちはそのように理解しています。わたしたちが管区レベルでも、協議会レベルでも、また、全修道会レベルでも実践しなければならないのは、エンマウスの物語と同じ方法論です。弟子たちは、意味を乞い求める者として旅に出ました。彼らは、きちんと対話するために沈黙を破り、主が彼らの心を照らされたまさにそのとき、自分たちの生活と経験を聖書の光の下に解釈することを学びました。二人は立ち止まってイエスに自分たちと一緒に留まってくだ

⁸⁶ 1 チェラノ 34.

⁸⁷ 会則 6:7-8.

⁸⁸ Cf. ヨハネ. 14:5-6; cf. 訓戒 1.

さるように願い、イエスは慈しみの心で彼らの所に入り、共に泊まってくださいました。そこで起こったことは兄弟的な交わり（communion）です。「食卓にともにつくと、イエスはパンを取り、賛美をささげて分け、二人にお渡しになった。すると二人の目が開かれ、イエスであることに気づいた⁸⁹」。それから二人は、仲間のところへ帰り、先ず彼らが話すことを注意深く聴き、それから自分たちの体験したこと、復活のキリストに出会ったこと、死に対する生命の勝利について分かち合ったのです。

45. 基本的なプロセスは単純ですが、すべて根本的なものです。
1) 出会うこと 2) 起こった事柄について話すこと 3) 福音の分かち合い・会則の再読 4) すべての恵みに感謝し、賛美し、祈ること 5) 兄弟的交わりを行うこと 6) わたしたちの生活を変容させた良い知らせを携えて、兄弟共同体の兄弟たちと全世界の兄弟姉妹たちの所に戻ることに。

46. この総括文書はすべての兄弟とフランシスコのカリスマと夢を分かち合うすべての人に開かれたものです。わたしたちはこれが、評価のプロセスのために、また、わたしたちの創立の恵みを祝うためのひとつの道具となればと願っています。ここでは向こう三年間のことを強く意識していますが、それに伴っているのは再創立のための熱い思いです⁹⁰。わたしたちの多様性の豊かさを考慮すれば、わたしたちのアイデンティティについての以上の諸考察を発展させる方法がたくさんあることを、わたしたちは承知しています。また、わたしたちのミッションについてのこれらのイニシアティブには多くの方法があり、それは信仰と識別の分かち合いの中で新しい実践を通して発展していくでしょう。とはいえ、わたしたちのカリスマが歴史の中で実現するために、その探求の道を照らすために幾つかの指針を付録として加えたいと思

⁸⁹ ルカ. 24:30-31.

⁹⁰ Cf. 「臨時総集会準備文書」 n. 2-3 ローマ 2006

います。

47. 兄弟たちがこの文書を手に取り、エンマウスの物語として読むように勧めたいと思います。わたしたちはこの総集会の間にあの弟子たちと同じような歩み方をしました。おそらく、皆さんたちにも未来へ向かう道（path）が開けてくることでしょう。いつも自分自身に言い聞かせましょう。「主はわたしたちに何を求めておられるのでしょうか。」わたしたちがこのプロセスを歩むなら、「良い状態から、さらに良い状態」へと確実に、そして絶え間なく進んでいくことでしょう。

兄弟たちよ、神の謙遜を考えなさい。
そして、その御前に心を開いて願いなさい。
あなたたちもへりくだりなさい
そうすれば神が高めてくださるでしょう
ご自身を残りにくあたえてくださったお方が
あなたたちを完全に受け入れてくださるように
授かったものを何一つとして自分のために
とっておかぬようにしなさい⁹¹

⁹¹ Cf. 全兄弟会への手紙 28-29.

未来へ向かう道

実践的な指針

48. この臨時総集会での体験全体を通して、私たちは「派遣されて宣教する使命を帯びた兄弟共同体（Fraternity-in-Mission）」としての召命に、未来へ向かう道を発展させる手段として実践と相互識別の大切さについて話してきました。私たちはこの強調点に従って2009年に目を向け、これからの三年間に、私たち自身が臨時総集会で確認した直観と洞察を証しする幾つかの方法論と方向性、そして指針をしっかりと見すえたいと考えます。

49. 私たちは可能な限り、そして本会の特徴である多様性を尊重しつつ、私たちの召命と兄弟性とミッションとを、個人、共同体、そして修道会全体の証しの一枚布に織り込んでいくプロジェクトに着手したいと希望しています。統合という観点から、こうした方向性と指針は互いに孤立する事なく相互に協力し合って成長しなければなりません。実現のための道を考えるに当たり、私たちは各共同体に以下の原則を検討していただきたいと願っています：

1. この総集会から出てきた最も重要な要素は、エンマウスの方法論です。私たちは会話と識別のこのプロセスを、私たちの第一の優先課題として紹介します。主イエス・キリストの足跡に従う兄弟として分かち合う、人間としての私たちの生活と信仰生活の両方に触れる事が必要です。方法論としてこのプロセスは、私たちの生活と仕事にしばしば傷跡を残す個人主義と孤立化の克服を進める事が意図されています。それと同時にさらに重要なことがあります。それは、私たちが祈り、生活、仕事において神体験を分かち合うしっかりした文脈の内に、自分自身を霊的に置き直す事ができるように、このプロセ

スが意図されているということです。この方法論は私たちの生活の様々な多分野 - 例えば初期養成と生涯養成、本会のあらゆるレベルの兄弟共同体生活、そして私たちの仕事や信徒と共にしている奉仕職においても応用されるでしょう。その論理的根拠とプロセスは、総括文書「主は道々わたしたちに話してくださる (Nos Habla en el Camino)」の本文で十分に説明されています。私たちは各共同体に、小さき兄弟としての成長の鍵となる礎として、この「エンマウスの方法論」を考慮し、実践して下さるようお願い致します。

2. 信仰の方法論を共有する事の重要性を強調しつつ、私たちは各共同体が現時点の問題と活動を考察するに際して、ここで示された提案を自身の状況がゆるす限りにおいてどのように実践するか慎重に考慮しなければならないと考えています。私たちの多様性を認める事は、この総集会の指標でした。そして小さき兄弟としてのアイデンティティをその土地に根付かせる能力とは、ここでの実践の指示が本会の様々な地域において、異なった形で、異なった適用の仕方になされる事を意味しています。ですから兄弟たちにさらなるプログラムの重荷を負わせるものではありません。むしろ、私たちの成長に向けた提案をしたいのです。ここで示された発展への多くの方針の中から、私たちは各共同体がその共同体の成長に最も適したものを見出して、それを実践して下さるようお願い致します。
3. 2009年の創立800周年記念祭の準備をしつつ私たちの旅路を続けるために、私たちは各共同体と協議会の皆様に、ここに列挙された分野や、自分たちの状況に当てはまると判断された分野における自身の成長を注意深く考察するようお願い致します。今度はこれらの分野によって、私たちが800周年記念祭において自己認識のプロセスと進歩の評価を行なう事が可能になるで

しょう。

信仰と兄弟関係が「良い状態」から「より良い状態」へ移行するプロセス

50. 信頼の絆を喧伝し強める心を取り戻す事は、私たちの小さき兄弟としての人間的成長に極めて重要で不可欠なことです。これは、対話のための共通の場を創り出し、私たち自身の歴史を分かち合い、私たち皆で祝う祝祭にすることで成就されるでしょう。それには私たちのコミュニケーションの仕方についての継続的な評価が含まれています。例えば：

- 私たちは何について語っているのでしょうか、避けている話題はないのでしょうか。
- 兄弟がその場にいる時、またいない時、私たちはその人についてどのように話しているのでしょうか。
- 私たちは表面的なレベルで話しているのでしょうか、それとも自身の召命について深く分かち合うのを心地よく思っているのでしょうか。
- 私たちは実際どのように兄弟の賜物を祝っているのでしょうか。信仰の賜物について、或いは私たちの召命の賜物についてはどうでしょうか。

51. 私たちは「エンマウスの方法論」を修道院レベル、管区レベル、協議会レベルで発展させる事によって、また共にキリストに従い、神への信仰を深める事を可能にするその他の手段を通して兄弟である事の喜びと苦勞を共に分かち合い、個人的な召命について内省しなければなりません。この方法論を適用する事によって私たちは、修道院レベル、そして管区や協議会レベルの様々な集まりでの神のみ言葉との対話において、聖体祭儀の中で、そして様々な人間関係や日常生活において兄弟的な分かち合いの学び舎となり、また、祈りと回心の学び舎ともなる事ができるのです。管区長や院長はこのプロセスに重要な役割を持っています。この

会話の方法は小さき兄弟としての私たちのアイデンティティの一部とならなければなりません。例えば、以下のような場面でそれを実践できるでしょう：

- 初期養成及び生涯養成において；
- 新しい兄弟が兄弟共同体に入ってきた時に；
- 定例の修道院会議において；
- 記念祭の時に；
- 私たちが働いている場で信徒と一緒に集まる時に；
- 召命に深い関わりのある場所への巡礼の機会に；
- 管区会議のために集まる時に；
- 私たちを取り巻く文化や社会の変化に応じて私たちの使徒職や現状を評価する時に；
- 本会の協議会及び合同協議会のレベルで。
- 2009年に備えるための(この臨時総集会をモデルとした)特別集会において；
- 兄弟共同体における和解と癒しのプロセスにおいて。

召命の司牧的関わりが「良い状態」から「より良い状態」へ移行するプロセス

52. 召命の喜びと苦勞を分かち合うために、私たちは召命の促進と識別と活性化のための、以下のような新たな手段を発展させなければなりません：

- 召命のプログラムを展開している他のフランスカン家族のメンバーと協働する。
- 兄弟共同体での生活や福音宣教の体験について語る兄弟たちの証しに関わる。
- 家族への働きかけ、特に若者たちへの働きかけをさらに促進させる。
- 本会内の兄弟たちの生活と、私たちを支えてくれる家族の生活とをより深く結びつける。
- 兄弟共同体における生活の識別を、私たちの召命選択の鍵

となる重要な要素として強調する。

53. 私たちの召命を成長させ、兄弟としての分かち合いがより大きな証しになり、私たちが召命生活においてより深い喜びの体験に到達するために、以下のような初期及び生涯養成のプログラムを発展させなければなりません：

- 修道院会議において対話と傾聴を奨励し強化する。それは修道院、異文化間、国際的レベルといったすべての次元において、私たちの召命の知識と実践を活性化させることを学ぶためである。
- 分かち合いの新しい様式を創り出す。
- 召命増加のための関わり、信仰の分かち合い、祈り、聖体祭儀とゆるしの秘蹟、そして派遣されて宣教する使命を帯びた兄弟共同体としての私たちの生活における活動と行動パターンについての定期的な評価を奨励する。
- 共同体間の連帯の具体的な実践を通して、修道院及び管区レベルでの兄弟的な同伴、矯正、ゆるし、和解の文化を発展させる。
- 私たちの召命について現時点における生活を識別するのに有用な方法論を指示する。
- 私たちの召命の成長を可能にする継続的な教育体験の場を創出し、念入りに仕上げる。
- 私たちの召命の喜びを表現し祝う、新しい出会いの形を考える。
- 召命の道（path）と仕事を互いに分かち合う。
- 個人的・共同体的な内省を励ますイニシアティブを発展させる。例えば長期研修期間（サバティカル）、黙想会、生涯養成の共同プログラム等。
- 兄弟たちの様々な関心分野に応じた年毎の集まりを開くことを奨励する。
- 兄弟共同体生活のすべての活動において、プラザーの兄弟と聖職者の兄弟との平等の証しを考慮する。

- 莊嚴誓願を宣立してから10年以内のすべての兄弟たちの召命の旅路を支える同伴と集まりの方法を発展させる。

54. 修道院及び管区レベルで指導的立場にある人々を励ますために、生涯養成の体験と活動を発展させなければなりません。これらのプログラムは、兄弟たちの生涯の旅路の全体にわたる同伴において、また私たちの召命生活を配慮する任務を引き受けるに際しても、私たちの成長を証しするでしょう。

- 私たちの召命の人間的な養成、とりわけフランシスカンの次元での養成担当者を育成するために、管区及び管区合同、協議会のイニシアティブを発展させる。
- 管区及び管区合同、協議会レベルで、修道院長と管区長の仕事を支援する活動を発展させなければならない。

55. 本会の歴史において兄弟たちの多くが高齢化しているこの時に、私たちはこうした兄弟たちを支え、共同体での彼らの存在を励まし、病に付き添い、彼らの忍耐を励ます教育的プログラムを発展させなければなりません。

56. 私たちは本会の知的遺産の再活性化を以下のような様々な手段を通して自覚的に強調しなければなりません。

- 本会の様々な研究センターの活動を推進し、知的、専門的な分野に携わる兄弟たちの生涯養成のために、受講しやすいプログラムの作成を促す。
- 私たちの福音宣教とミッションに対するフランシスカンの貢献を高められるように、生命科学、哲学、神学、霊性の研究を管区レベルで推進する。
- フランシスカン哲学と神学と霊性、及びそれらが私たちのミッションにとって持つ意味合いを、あらゆるレベルの養成と兄弟たちの様々の勉学プログラムに統合する。

相互依存性、国際性、多文化性が「良い状態」から「より良い状

態」に移行するプロセス

57. 修道会及び協議会レベルにおいて、私たちは相互依存的、多文化的、国際的な兄弟共同体への帰属意識を高める共同のプログラムを重要視し、強調しなければなりません。

- 管区合同及び協議会レベルでの、信仰の分かち合いと召命の相互支援活動。
- 協議会レベルでの、生涯養成担当者によるプログラム作成への協力。
- 管区合同の初期養成プログラムの継続的発展。
- 聖地やアシジ、その他の福音宣教の現場で行なわれているような体験的方法で福音宣教とミッションの価値を統合するプログラムの支援。このプログラムは互いの必要や資源、人員、そして福音宣教のイニシアティブを分かち合う。他の兄弟たちへの語学教習プログラムや、兄弟会のプロジェクトへの貢献を通じた人的物的資源面での連帯の促進も含まれる。
- 諸管区間の協力交流の方策を継続的に強調し、私たちの召命、兄弟性、ミッションの一致における成長の機会とする。

派遣されて宣教する使命を帯びた兄弟共同体としての召命が「良い状態」から「より良い状態」へ移行するプロセス

58. 私たちは教会における召命とミッションの現実を具体的に証しする新たな場と冒険的試みを創造するために、現在の職務的な配置について継続的な批評と評価に着手しなければなりません。この事は特に、私たちの現在の職務が修道者としての私たちの預言的召し出しと、小さき兄弟としてのアイデンティティをどのように反映しているかを判断するための評価を含みます。わたしたちの財産の分かち合いと本会の一部領域の再編成という差し迫った問題を考えれば、わたしたちはこの再編成に伴う急速な変化と困難に応える同伴の方法を切り拓かなければなりません。このブ

プロセスを導く幾つかの要素には以下のようなものがあります。

- 管区及び管区合同、協議会、修道会レベルでの評価と識別、再編、そして支援の具体的なプログラム。
- 祈りの生活と信仰の分かち合いのための時間の規定など、具体的次元での私たちの職務と兄弟共同体の環境の評価。
- 兄弟的生活をうち立てるに十分な数の兄弟たちのいる共同体創設への参画と実践。
- 本会司祭養成について、その修道者的・フランシスカンの次元とそれが私たちのミッションに意味するものを具体的に確認する養成計画を修道会レベルで公表する。
- 司教や部分教会と共に働くにあたって、教会と世界に奉仕する私たちの召命に固有のフランシスカンの次元を保持し強めるのに役立つ指針を修道会レベルで作成する。
- 世界と教会に奉仕する「派遣されて宣教する使命を帯びた兄弟共同体」としての私たちのフランシスカン・アイデンティティの教会論的意味合いについて神学的研究を行なう。
- 信徒との協働や共に働く人々に対する小さき兄弟としての私たちの奉仕、そして貧しい人々と共にあるという私たちの召命を強調した福音宣教の新たな場所と働きを作り出す。
- 初期養成と生涯養成プログラムにおいて、私たちの召命のしるし・道具である単純で人間的な働きの「恵み」を強調する。
- 世俗化した社会と諸宗教間対話のための福音宣教の方策を、特に成功した方策、また新しい方策について私たち自身の間で分かち合う。

59. 初期養成と生涯養成のすべての養成プログラムの全体にわたって、私たちは福音宣教の自覚をいっそう深く発達させ、諸共同体間の協働の価値と実践を植えつければなりません。この使命感の実践には次のような幾つかの方法があります。(a)初期養

成におけるミッション体験の推進、(b) 様々な方法での諸宗教間対話の実践的な体験学習、(c) 荘厳誓願の管区合同の準備期間、(d) 管区合同の他の集まり、特に生涯養成でのミッション体験に焦点を当てる。

60. 小さき兄弟になるという同じ一つの召命の内にあるすべての兄弟たちは、等しく平等であるという事が強調されなければなりません。もちろん同時に、聖職者としての召し出しを受けた兄弟たちの異なる賜物と価値を尊重しなければなりません。これには以下の事が含まれます。

- 司祭職を優先的に重視する組織の在り方を乗り越え、ミッションにおけるブラザーの兄弟と聖職者の兄弟との平等のしるしとしての兄弟共同体の優先性を強化する場所と働きへと向かう事によって、私たちの召命を推し進める管区及び管区合同のイニシアティブを発展させる（貧しい人々や取り残された人々の生活は、この証しをするための特別に恵まれた場である）
- 平等な兄弟共同体であるという私たちをよりよく証するようなミッションの新しい方法の促進を、特にブラザーの兄弟たちの証しを勇気づけるイニシアティブとミッションを展開する事によって推し進める。
- ブラザーの兄弟と聖職者の兄弟たちの平等性の問題に触れる時、ミッションへの養成のために初期養成と生涯養成とに統一性を持たせることに実質的な重点を置く。

公報・2006年臨時総集会

翻訳・発行：フランシスコ会日本管区

発行日：2006年12月25日

106-0032

東京都港区六本木 4-2-39

聖ヨゼフ修道院

03-3403-8088